
魔法少女リリカルなのはS t r i k e r S ~大空を舞う黒き侍

クルセイド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 大空を舞う黒き侍

【Nコード】

N14750

【作者名】

クルセイド

【あらすじ】

ある日くそつたれでファッ কিনな神様のミスで死んでしまいました。

ってふっざけんなあ！！

しかもその神様全然反省してねえしっ！！

は？何？お詫びに第二の人生くれてやるって？

よっしゃあつ!!また人生送ることができるっ!!

そう思った矢先、俺に待っていたのは……

*只今、メインヒロインの投票&後書きのコーナーやゲストを募集しておりますっ!!気軽にじゃんじゃん書いて下さってくださいっ!投票&募集待ってますっ!!

その0 ふざけた神様（前書き）

いきなり三話連続投稿。駄文でもよければ読んでください。

それでは、大空を舞う黒き侍、始まります。

その0 ふざけた神様

……どこだここ？

俺は何故か真っ白な空間にいた？

ホワイイ？さっきまでワタクシ家でくつろいでましタヨネ？

「どこだよこっつー！！」

俺は頭を掻いて大声で叫ぶ。

「あの世とこの世の狭間ですよ」

いきなり俺の目の前に、蒼い髪に銀色の瞳をした女の人出现在了。

「ンだてめえ？てか、ここどこどころ」

うわっ！自分で言うておきながら感じ悪いなっ！

普段はもっとフェミニストですよ？いやホント。

「ですから、あの世とこの世の狭間です」

「……………えっと、いい病院紹介しようか？主に頭の」

「至って正常ですので結構」

いやだってなあゝ。確かにここは訳分かんない場所だけ……………いや待

て。普通、見渡す限りの景色が真っ白なんて、ありえるか？

いやさらに言うなら、目の前のこの女……なんか体が光ってるんだけど。後ろから後光がさしてんだけど。

「……ひよつとして、俺って死んだ？」

「はい。中々悟い方ですね」

「いやあそれほどでも……ってちよつと待てえっつ……！」

おかしいだろっ！俺は家にいたんだぞっ！？どうやったら死ぬんだよっ！？

「ああ、それは“間違えてあなたの家に隕石を落としてしまった”からです」

あゝなる……今こいつ何て言った？

今の話を言葉通り受け取ると、まるでこいつが落としたみたいに聞こえるんだが……

「あ、はい。その通りです」

認めやがったっ！しかも悪びれずあっさりとっ……！

「いやいやっ！普通にそんなこと無理だろっ……ンなもん神様でもない……」

「あっ、それ私です」

「……ハイ？」

「ですから、私が神様です」

……イマコイツナンテイッタ？

カミサマ？

上様？

加美様？

神様？

「えつ、ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ
っ！！？」

うそっ！？マジで神っ！？

いやいやちよつと待てっ！あり得な……いや、もうあり得ない事態が目の前で起こってる。

……てことわだ。

「あ、あの。神様、質問なんですが……」

「何ですか？」

「あなたさっき、
“間違えてあなたの家に隕石を落とした”
”って言う

「どゆこと？」

「死んだ人間が生き返ったりしたら、どうなるかはわかりますね」

「そりゃ……………大惨事だな」

「はい。ですからあなたを元の世界に戻すことは出来ません」

「つまり別の世界で、全く新しい人生を謳歌しろと？」

「本当に悟いですね。感心します。あつ、アメいりますか？」

「ああ、こりゃどうも……………ってガキか俺はっ！！」

「はい。ガキですよ」

「えっ！？」

何故かいきなり、神様が大きくなった。

いや違うっ！

俺は慌てて自分の体を見た。

「なっ、何じゃこりゃあああああああああああああああああああああああああ
ああああああああっっっ！！！！！！！！」

俺の体は……………縮んでいた。

俺って十九歳デスヨッ！？十歳くらい若返ってマセンかっ！？

「では、あなたに聞きたいことがあります」

「無視かつ！？この体については無視かつ！？」

「無視です」

断言しやがったっ！！

もう何言っても無駄なんだろうな……

「ではもう一度言います。あなたに聞きたいことがあります」

「もう好きにして……」

泣きながらそう言う。

「あなたの好きなマンガ、もしくはアニメは何ですか？」

「……………ハ？」

いきなり何だ？

……………はっ！もしかしてその世界に転生させてくれんのかっ！？

だっ たら……

「銀魂っ！！」

「では、魔法少女リリカルなのはの世界に転生させます」

「何でだよっ！！」

もう本当に訳分かんねえよっ！！後、リリカルなのはって名前しか知らねえしっ！！

「そしてあなたの能力ですが……」

まさか銀さんみたいな木刀一本で最強の戦闘能力とか……

「ブリーチの一護の能力に、少しアレンジを加えたような感じにしておきました」

だから何でだよっ！！ブリーチの話一切してなかったじゃんっ！！何？好きなの？リリカルなのはとブリーチが好きなの！？

「はい」

認めちゃったよこの人っ！！あつ、神様か。

「そして、何とさらに……」

ついに銀さんみたいな……

「洞爺湖と書いてあるただの木刀を差し上げます」

「何で俺の希望だけ適当っ！？」

「冗談です。今から差し上げる木刀は、どんなことがあっても壊れない、銀さんの持っている星砕以上の頑丈さを誇ります」

「マジでっ!？」

「はい。ただし、それを使いこなせるかどうかは……」

「俺次第、か？」

「はい。それは一護の死神の力然り、です」

「上等。生きてた頃は死に物狂いで鍛えてたんだ。その位別に構わねえよ」

「そうですか。では早速」

神様がそう言った瞬間、俺の足下に穴があいた。

「へ？」

「第二の人生、御堪能あれ」

「ふざけんなあああああああああああああああああああああー
――……………」

俺は穴に落ちながら誓った。次あのクソ神と会ったら、ぜってえぶん殴る、と。

その1 誤解と出会い

「だあああああああああああああああああああああ
つつ！！？？」

只今俺、絶賛落下中。およそ高度数千メートルから。

死ぬっ！生き返った早々マジで死ぬっ！！

地面まで、もう残り数百メートル。これ死んだな。

「って、諦めてたまるかアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアッ！！！！」

そう叫びながら、手をじたばたと動かすが、当然そんなことで速度
は落ちない。

そして地面が目の前に迫り、強く目を閉じた。

死ぬっ！！

「……………あれ？」

おかしいな。いつまで経っても衝撃がこないので、恐る恐る目を開
けると、自分が浮いていた。

ホワッツッ！？

何？俺、もしかして空飛べんの？

そんなことを思っている俺に、天から一枚の紙が落ちてきた。

それを拾い、読み上げる。

「何々。『あなたの態度が無礼だったので、軽い嫌がらせであなたを高度数千メートルから落としました。まあ気にしないで、せいぜい第二の人生を無駄に堪能してください。By 神』」

…………ふっ

「ふざけんなあああああああああああああああああ
あああああああああああああああつつつ！！！」

俺はそう叫んだ後、紙に続きがあるのに気づき、読み始める。

『P・S・お詫びに家庭教師ヒットマンリボンの能力もあげますから勘弁』

は？

すると、どっから現れたのか、俺の足下にボストンバックが現れた。中身を漁ると、七色のリングと、七つのボンゴレボックス、ミントの手袋、黒いベルト。それに見たことのないボックスがいくつかあった。

『そのリングは、あなたの意思で自由な種類の炎をだせます。精製度はボンゴレリングと同じです。オリジナルのボックスは、開けてみてのお楽しみ。扱えるかどうかはあなた次第。因みにボックス

スは、そのベルトの中にしまうことができますので。ソレデハ』

これも使えるかどうかは俺次第、か。

俺はそのことを確認した後、現状を把握することにした。

まず、俺は九歳くらいの子供になっている。これはあのクソ神のいたずらだろう。

そして、洞爺湖の文字の入った木刀。

取り敢えず腰にさしとくか。

斬月の形をした首飾り。何だこりゃ？

大量のリングとボックスの入ったバック。取り敢えずリングは指につけとくか。……サイズが全然あわねえ。ミントの手袋は……あれ？いつの間にか『27』の番号が入った二つのブレスレットになった。取り敢えずそれも付けといた。ベルトは……うおおっ！？ボックスがベルトに吸い込まれたっ！？異次元スペースでもあのか？

持っているもの確認はすんだ。

次は現在位置だ。見たところ、森っばいんだけど……

「……………そっいや俺、金ないんだけど……………」

さっ、最悪じゃんっ！！飢えるっ！確実に飢えるっ！

どうしようか迷っていると、草むらに何やら光るものが目に入った。

それを手に取って見ると、青い宝石だった。

「……………これ、売れるんじゃない？」

よっしゃあっ！そうと決まれば早速……

宝石を掲げて、エクスカリバーッ！、と叫ぼうとしたら、その宝石をカラスに取られた。

いやあ。間抜けなことをしたなあ。

「って待てえっ！それには俺の生活がかかるとるんじゃないあっつ！」

そう叫び、木を一瞬で素早くのぼり、カラスに飛び付く。

名付けてルンダイブッ！！

……………そのままか。

そしてもうすぐ手がカラスに届きそうになった時、宝石が光り始めやがったっ！！

ホワイイ？何故こうなった？

目の前で人を乗せて飛ぶくらい余裕だろと思うくらい馬鹿でかくなつたカラスを見て、そう思う。しかもそのカラス、あるうことがその大きな翼でこの俺様を地面に叩きつけやがった。

「
...
ふつ
ふつ
ふつ
」

今日の晩飯は鶏肉だあ。

俺はバックを肩からおろし、腰の木刀を抜く。

生きてた頃は、化け物みたいな親父に毎日しごかれてたんだっ！このくらい何とも……

[illegible]

こんなんじゃ、木刀振る度にバランス崩しちまうっ！あんのクソ神っ！ぜってえ分かかってやりやがったなっ！！

そんなことを考えていたら、カラスがこっちに向かってきた。

怖っ！只でさえ黒くて不気味なのに、それが巨大化つてめっさ怖い
ですはい。

俺は慌てて、リングに炎を灯すイメージをする。だが、リングに炎は灯らない。その後すぐに斬月の首飾りを見るが、どう使えばいいか全く分からなかったので、スルー。

仕方なく木刀一本で、カラスの化け物とやり合うことにした。

こちとら生活かかつとるんじゃあ
あああああああああああああ
あああああああつつ！！！！

俺は勢いよく木刀を迫ってきたカラスの頭に振り下ろした。だが当

然、子供の力では、その突進を止められるはずもない。しかしそんなことは計算の内。叩きこんだ木刀を軸に一回転し、カラスの背中に飛びうつる。俺はその後急いで次の攻撃に入る。

振り落とされる前に決めるっっ！！

俺はカラスが動きだすより早く、何発も木刀をたたき込んだ。

「でりゃあああああああああああああああああああああああああ
ああああああああっ！！！！」

段々とカラスが弱まっていく。

よしっ！これで最後だっ！

俺は左手をカラスの背中に添え、右手に握る木刀で、突きの準備をする。

「はあああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああっ！！」

勢いよく突きが放たれ、カラスが地面に叩きつけられる。

やつ、やったっ！倒したっ！てか死ぬかと思ったっ！

俺はカラスが動かなくなっただのを確認すると、安堵の息をはきながら、カラスから降りた。

すると、カラスはみるみるうちに元の大きさに戻り、そのそばにはあの青い宝石があった。

「もしかしくなくても、さっきの頂上現象は、アレのせいかな？」

宝石を拾いあげ、それを掲げて見る。

……………何だよこれ。

よく分かんないけど、物凄い力を感じる。

そつとう危険な代物だな、これ。

さてどうするか。さすがに放っておくわけにはいかないし、質屋なんてもつての他。

うゝん…………

ぎゅぐるぐるゝゝ

……………腹減った。

今物凄い運動をしたところだからなあ。

はあ。マジでどうしようか？

俺がため息をつくとき、俺の体に異変が起こった。

何とっ！体がもとに戻ったのだっ！！

……………いや。正確に言うと、十六歳くらいに戻った。本来の俺の身長より少し背が低い。

すると、また天から一枚の紙が降りてきた。

『嫌がらせも飽きたので、体を元に戻しますね。あ、でもそのままだと面白くないので、若干若くしておきました』

……………もう突っ込む気にもなれねえよ。

俺の体は、あいつのさじ加減一つでどうにでもなるんだなあ。

俺がそんなことを思っていると、空から金髪の女がこっちに向かってきているのを見つけた。

うわあ美人。淡白にそう思う。今の俺はそれほどまでに荒んでるのさ。

俺はそれを見た後、バックを抱えてその場から歩いて離れる。

さて、どこに行くか……

「止まちなさいっ!」

うーん、この宝石どうすっかなあ。取り敢えずどっか安全そうな場所……

「聞こえていますか?もう一度言います。止まちなさいっ!」

「へ?あ、俺?」

俺が振り返って聞くと、女の人は頷いた。

「えっと、何か用？」

「管理局機動六課、フェイト・テストロッサ・ハラウンです。ここで何をしていたんですか？」

「何って………化け物と戦ってた」

「化け物？」

警戒していた女の顔がさらに険しくなる。俺はそんな女の様子を見ながら、のびてるカラスを指差す。多分死んではいねえだろ。その辺は考えてたし。

「只のカラスにしか見えませんか？」

「いやそれがさあ。信じらんないだろうけどそのカラス、この宝石加えた途端いきなり巨大化してさあ」

そう言いながら、宝石を女に見せる。すると、女の顔が驚愕に染まる。え、何？これってそんなに危険なものなの？

「ジュエルシード………どこでそれを」

睨まれてたじろぐ。やだこの人。めっさ怖い。

「その草むらに落ちてたんだよ」

俺は何でもないように答える。実際はめっさびびってます。ブルッてます。ちびりそうですはい。

「そんな嘘を信じるとでも?」

そう言つて、女は俺に黒い斧みたいなものをこっちに向けてくる。
あれ?俺、めっちゃピンチ?

「い、いや嘘じゃなー……」

「問答無用っ!」

女が斧を振るつてきたので、仕方なくそれを木刀で受け止める。

ガキイッ

女は驚いた表情をするが、驚きたいのはこつちだ。華奢な体に見舞われない力と速度。しかも俺の所まで一步で間合いをつめやがった。
いや、あれはどつちかというと……

「あんた、空飛べんの?」

つばぜり合いをしながら聞くが、女は答えない。いやよくよく考えたら登場した時に気付けよ俺。

俺はこのままじゃまずいと思い、一度距離をとる。

「バルディシュッ!!」

「Yes Sir Photon Ranser」

喋ったっ!?今喋りましたよあの斧っ!!

てか、何あのバチバチいつてる球？ものすつげえ嫌な予感しかしないんだけど……

「フアイヤッ！！」

女の叫びと同時に向かってくる光球。

「ぎゃあああああああああああああああああああああ
あっつ！！！？？」

俺は無我夢中で斬月のペンダントを掴み、叫んだ。

「斬月っつ！！」

瞬間、俺の左手に三日月型の刀が現れ、俺はそれを振り下ろした。

ドガガガガアアアアアアアアアンツッ！！！！

それが俺が、初めて力を使った瞬間だった。

その2 入隊

うそーん。

俺は目の前の地形が変わったことに驚いていた。

今俺は死覇装に身を包み、右手に木刀、左手に斬月を持っていて、俺の目の前では女が信じられないものでも見るような目で見えていた。

俺だって信じらんないよっ！！まさかいきなり月牙天衝を放てるなんて……

そんなのだ。さっき俺は自分に迫る光球から身を守るために、何となく「斬月っ！」と叫び、出てきた斬月をこれまた何となくおもいつき振り下ろすと、月牙天衝を放ててしまったのだっ！！

月牙天衝の余波で、光球は全て消し飛び、地面は抉れ、土煙が辺りを支配していた。女に当たらなくてホントラッキーだったっ！！危うく人殺しになるところだったぜえ。

「てか、いきなり使えたよ……」

もつと段階を踏まえないと使えないのかと思った。もしかしてもう卍解使えちゃったりして？

俺は斬月を前に突き出し、叫んだっ！

「卍・解っ！！」

しーーーーん。

はい無理でした。

「いきなりの発動は無理だ」

いきなり斬月が喋りやがりましたよ。

「……斬月、だよな？」

「そうだ。この世界ではデバイスと呼ばれている代物だ」

デバイス……あの女の斧も、デバイスってやつか。

「じゃあこのブレスレットもか？」

俺は「27」と書かれているブレスレットを見て聞く。

「いかにも。ただし、そやつらは私のように話すことはない」

「そうなの？」

「AIという知能を持つデバイスと、持たないデバイスがあるのだ」

「へえ。てか、やけに詳しいなオイ」

「汝を見守るものとして当然だ」

「さいですか」

俺はそこで斬月との会話をきり、女の方に向き直る。

「なああんだ」

「……………何ですか？」

絶えず警戒を解かず聞いてくる。段々悲しくなってきました。

「取り敢えずさ。これあげるから、ここがどこか教えてくれない？」

「……………へ？」

呆けたような顔になる。

俺はその後、転生の部分をぼかして、何で自分があそこにいたのかを説明した。気付けばあそこにいて、草むらに何かあったからそれを拾って、カラスに奪われると、カラスが化け物になり、そこで女が登場したことに。

「申し訳ありませんでしたっ！！」

説明が終わった瞬間、女はすごい勢いで頭を下げて謝ってきた。

「いや怪我もなかったから、別にいいけど……………」

それより、今の力について聞かれると面倒だな。木刀と斬月は、まあ何とか誤魔化せるか。ただ、リングとボックスは誤魔化せないだろう。さっき念話とかいうので斬月に聞いた。

ジュエルシールドは既に女に預けた。後はこいつから逃げるだけっ！！

「じゃ、俺はこれで」

「待ってください」

はいエスケープ失敗。何？分かり切ってたことだって？そこはご愛嬌ってやつで一つ。

とはいえ、面倒くさいことになったなあ。

「失礼ですが、一緒に来ていただけないでしょうか？」

「だが断るっ！」

「フエイトちゃ〜んっ！！」

援軍が来やがった。逃げ場なし？

まあそんなわけで、俺は目の前の奴らに大人しくついていくことにしたのだとき。めでたしめでたし。

「はじめまして。機動六課部隊長の、八神はやてです」
うそーん。

何度も同じ驚きかたするなって？いやいやでもこれは驚くでしょ。
自分と歳があまり離れてないくらいの女が、こんなでかい部署の部
隊長？

どんなコネを使った？それとも実力か？

「私はさっきも言ったと思うけど、フェイト・テストロッサ・ハラ
オウンです」

「私は高町なのはです」

美女三人から自己紹介をうける。普通は嬉しいシチュだろうが、力
のことがばれるかどうか、気が気じゃない俺は、それどころじゃな
い。確実に俺の力は異質なんだ。ばれる訳にはいかない。

「あなたのお名前は？」

フェイトが笑いながら聞いてくる。さて、ここで問題です。俺って
何て名前だっけ？教えて、斬月っ！！

《無理だ。前世の名は、使えないことになっている》

《じゃあどうしろとっ！？》

《思いついた名を名乗れ》

思いついた名前……

「どないしたんや？」

ずっと黙っていた俺を、はやてが訝し気に見てくる。

「あ、ああ。何でもないよ。何でも」

「そうかあ。で、何て名前なん？」

もつため口かよ。しかも関西弁。

……何故だろう。この人とは気があいそうだ。

俺はそんなことを思いながら、咄嗟に思いついた名を名乗った。

「坂田銀時。あだ名は銀さん。よろしく」

……ああ。俺って馬鹿だなあ。

「で、銀ちゃん。早速聞きたいねんけどな？」

自己紹介が終わり、はやてが俺にそう切り出した。

「いやその前に、ここはどこなんだ？何でフェイトとなのはは空を飛べるんだ？てか、こんなでかい隊舎の部隊長って、はやてって何者？」

「……………ホンマになんも知らんの？」

「知らんっ！」

「いやそんなんでも胸はられてもなあ」

俺ははやてから、この世界について聞いた。ここが、ミッドチルダと呼ばれている世界であること。はやて達が所属している管理局が、魔法という力を使い、管理世界を管理していること。デバイスは、魔導師が効率よく魔法を発動させるためにあるものということ。俺は次元漂流者とかいうものということ。ロスト・ログアとかいうおっかないものの一つ、レリックを回収するために機動六課を建てたこと。その他いろいろ。

「……………とんでもない世界だな」

説明が終わった俺の第一声は、そんな言葉だった。

神様も面倒なことを……

「それでな、銀ちゃん。さっきも言っただけど、銀ちゃんに聞きたいことあんねんけど……」

「ああいいぜ。こっちの質問に答えてくれたんだ。答えられることには答えてやるよ」

まあ、転生者だとばれない範囲だな。

「ありがとうな。ほな質問やけど……フェイトちゃん」

「うん。銀時は、あの時、すごい衝撃波を放ったよね？」

月牙天衝のことか。

「どうしてあんなことができたの？それにデバイスを三つも持つて
るみたいだし」

え？三つ？もしかしてこの木刀もデバイスってやつなのか？おいおい
神様。説明不足もいいところじゃねえか。

「あれはただ単にがむしゃらにやったらああなっただけだよ。どっ
かの誰かさんがいきなり攻撃してきたからなあ」

「うう……ごめん」

ありゃ？マジで落ち込んだ？

「おいフェイト。冗談だぞー」

一応フォローをいれとく。

「デバイスについては、気が付いた時に目の前にあったから、取り
敢えずパクっとけてって思いそのままパクった」

「いやそれアカンやんっ！」

「他人のかもしれないよっ！？」

はやてとなのはが同時に俺に突っ込む。むむ、言い訳まづったか？

「まあ取り敢えず、俺にわかるのはこれくらいだな」

「そういえば、剣の腕もすごいって聞いてんけど……」

「ああ。毎日親父にしごかれてたからなあ。普通と比べりゃ、かなりのもんだぜ？」

「へえ」

三人は感心したように声をあげる。さて、これからが問題だ。

「で、これから俺ってどうすりゃいいのでせうか？」

「その喋りかた、ム力つくからやめような」

むむ。某とる主人公風な喋りかたはいけないのか。

「まあ冗談はおいといて、実際問題どうすんの？」

俺がそう聞くと、はやては少し悩んだ後、口を開いた。

「なあ。もし銀ちゃんさえよかったら、機動六課きどうに来えへんか？」

「……………は？」

「はやてっ!？」

「はやてちゃん!？」

俺だけでなく、フェイトとなのはも驚いている。そりゃそうでしょうねっ！！俺だってびっくりだよっ！！

「マジで言ってるんでせうが？はやてさん」

「マジもマジ。大マジや。後、次その喋りかたしてももうツッコまへんから」

むむ。ボケをスルーされるのはキツいな……じゃなくてっ！！

「お前わかってんの？見ず知らずの人間いきなり部隊に引き入れるなんてさあ。俺がスパイとか、あるいはろくでもない人間だったらどうすんの？」

「ホンマにそんな人間やったら、わざわざそんなこと言わへんし、後者のほうやったら、フェイトちゃんのやったことは許さへんと思うけど？」

「デスガワタクシマハウガツカエマセンヨ？」

「何で片言？でも銀ちゃんは、フェイトちゃんのフォトンランサーを吹き飛ばしたんやろ？」

「偶然偶然」

「でも、才能は絶対にあると思うで」

「きらりと光るものがある、ってか？」

「言い回しがおかしいのはこの際無視して、まあそういう訳や。う

ちの部隊は人手不足でなあ。銀ちゃんみたいなのは、どうしても
れときたいんよお」

ふむ、成る程な。まあ、あてがあるわけでもないし、別にいつか。

「銀ちゃんさえよかつたらなんやー」オツケ。入るよ」ーホン
マかつ!？」

はやてが身を乗り出して聞いてくる。人手不足ってマジなんだなあ。

「ホンマもホンマ。別に行くあてがあるわけでもないからな。入る
よ、機動六課」

俺の言葉を聞き、三人の顔は喜びに染まる。

はてさて、これからどうなることやら……

その2 入隊（後書き）

どうでしたでしょうか？

感想待ってますっ！！

あと、いきなりですが投票を求めたいと思います。

ずばり、ヒロインを誰にするかです。ぶっちゃけ全く決めてません。ですので、読者の皆様の投票によって決めようと思います。期限は……取り敢えず、機動六課の休日の話に入るまでにさせてもらいます。

ヒロインにして欲しいキャラクターの名前を、感想のリクエストの欄に書いて送ってください。

投票待ってます。

その3 剣士と侍（前書き）

今回若干バトル入りますはい。

描写ははつきり言って自信全くないです。

自分の文才のなさに絶望したっ！！

てなわけで、その4、どうぞ。

その3 剣士と侍

ぐぎゅるぐぎゅる

はやて達との話が終わった途端、気が抜けたせいか、盛大にお腹をならしてしまった。

だって仕方ないじゃんっ！ただでさえ腹減ってる時にあんなことしたんだからさあっ！！

「あゝ……取り敢えず、食堂行く？」

「……お願いします」

という訳で、4人で食堂に向かった。た、助かった。もう少しで腹と背中くっつくところだったZ.E。

「じゃあ、フエイト達があそこにいたのは、その次元震ってやつがあつたからなのか？」

俺は飯を食いながら、フエイト達がどうしてあそこにいたのかを聞いていた。

「うん。次元震は結構危険なことなんだ。次元震があつた場所には、稀にあなたみたいな次元漂流者がいるんだけどね」

「へえ」

因みに俺の食っているのはナポリタンに似た何か。今食べてるので十皿目だ。

「よ、よくそんなに食べられるね」

なのはが青い顔をしてそんなことを言ってくる。

「まあ、自分でも大食漢だつてのは分かつてるけどな」

「でも全然太つてないよなあ」

「そういう体質」

瞬間。嫉妬に目を輝かした女三人につねられた。

「あたたたたたたたたたたたたたたたたたたたたたた
つ！！！？」

某北斗 拳みたいな悲鳴をあげる。痛い痛いっ！！

まあすぐに解放してくれたけどね。

飯を食べ終わった後、はやてとフェイトは仕事に、なのはは俺に紹介したい人がいるとかで俺の案内。

さて、どんな奴を紹介してくれるのやら……

「……………」

俺は紹介させられた奴を見て、啞然としていた。

片方はいい。ピンクの髪を後ろで一つに括ったポニーテールの長身女。うん見るからに強そうだね。

だがもう片方を、俺はじっと見ている。赤い髪を二つの三つ編みで括った、小学生くらいの女の子。

「なあなのは」

「うん？」

「いくら人手不足だからって、こんなガキ戦わせるのはどうかと思うぞ」

ドゴア（ガキにハンマーで殴られる音）

何しやがるファッキンっ！！

「誰がガキだって？」

顔を引きつらせながらそう聞いてくる。

「えっ？お前以外にガキなんてー」「ドガァアッ（地面をハンマ―が砕く音）」「すいませんでした（土下座）」

プロ顔負けの土下座を、コンマ数秒で実行。プロがあるのかつて？あるんだよ。俺の心の中にな。

「いやかつこよく言ってるつもりだろうけど、滅茶苦茶カツコ悪いからね？」

「え？そう？」

起き上がりながらそう聞く。

「もうちょっとプライド持とうよ……」

なのはは呆れたようにそう呟く。プライド？そんなもんは晩飯のおかずに出しちゃったさ。

まあ仕切りなおして、

「坂田銀時。次元漂流者とかいうのらしい。お前らは？」

「ヴォルケンリッター、烈火の将、シグナムだ」

「ヴォルケンリッター、鉄槌の騎士、ヴィータ」

「よろしくな。シグナム、ヴィータ」

取り敢えず挨拶はすんだ。

「時に坂田」

「銀時でいいよ、シグナム」

「分かった。銀時は、剣の腕がすごいと聞いたんだが……」

「まあそれなりに……」

何故だ？俺の額から冷や汗がでるのは何故だ？なのはとヴィータが同情するようにこっちを見ているのは何故だ？

「では、私と模擬戦をしよう」

「待てやコラ。“では”の用法がおかしいだろ。辞書で調べてこい」

「高町」

無視かコラ。

そしてなのはも何承諾したかのようにキーを操作しちゃってるの？

「おいおい。俺は魔法が使えないんだぞ？勝てるわけねえだろ」

「そうなのか？」

シグナムが意外だとばかりにそう聞いてくる。

「なら、木刀での打ち合いにするか」

どうやっても俺には逃げるといふ選択肢がないようだ。ああくそっ！もし“ブラッドオブボンゴレ”があれば、なのはに誘われた時点で断れたのにっ！！

俺はたかを括って、木刀（そのうち名前決めよう）を構えて、シグナムと数歩距離をとる。

シグナムも、どっから持ってきたのかは不明だが、いつの間にか持っていた木刀を構える。

……久しぶりに感じるな。この緊迫感。剣を持った者同士が対峙した時のこの感覚。いつも死に物狂いで親父の剣劇と戦ってきたから、何か少し懐かしく感じるな。

「何を笑ってる」

「そっいうお前こそ」

俺は懐かしさと武者震いで頬が緩み、それを指摘された。でもシグナムも笑ってるじゃん。生粋の戦闘狂なんだろうなあ。

さて、冗談はここまで。ここからはシンキングタイ……じゃなかった。真剣タイムの始まりだぜっ！

シグナムの構えには隙が全くない。対して俺も隙を作らないようにしている。

だけど俺の剣って、我流だからなあ。親父の剣をウケながら、気付けば勝手にこんなスタイルになってました、って感じた。まあよ

うするに、型の一切ない剣なのだ。それに対してシグナムは、何つか……歴戦の猛者って感じで、数多くの実戦で磨いたような……そんな鋭さが、構えから見て取れる。

真剣にやって勝てるかどうか……負けて当たり前、引き分けて上等勝ったら奇跡ってか？

上等だコラ。こっちにだって、剣に関してなら、安いプライド持ってたんだよ。親父に恥じないような剣になるために、毎日必死にやってきたんだよ。意地でも絶対に勝ってやるっ！！

そう、心のなかで叫び、自分を奮い立たせ、突撃した。

まず初撃。俺は横薙に木刀を振るうが、それを木刀を斜めにスライドさせ、あっさりと受け流される。

そして隙ができた俺に、シグナムが木刀を振るうが、俺はそれを二歩下がって避けた後、上に受け流された剣を振り下ろすが、それを木刀を上に掲げて受け止められる。

「やるな」

シグナムが口に笑みを浮かべながらそうやってきた。だから俺も笑みを浮かべ、「お前もな」、とかえした後、距離をとる。

一流の剣士って奴は、剣を交えただけで、相手のことがわかるというが……

今ならその意味がわかるぜ。

シグナムが、自分の剣にどんだけの誇りを持っているかが、痛い程伝わってくる。ならこっちも、全力で応えるまでだっ！！

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
っっ！！」

一気に距離を縮め、全力で木刀を何度も振るう。俺の得意な剛剣。圧倒的な速さと力、型のないでたらめな動きを、経験で無理矢理形にした剣。それが俺の剣だっ！まあぶっちゃけ、原作の銀さんと同じわけだが……

何度も木刀同士が打ち合う。フェイントなんていれない。ただ、真正面からお互いに打ち合う。

やっぱりシグナムには隙がない。だけどそれが何だっ！！隙がないなら作るまでだっ！！

俺は更に剣速をあげる。俺の怒涛の剣劇も、シグナムは全て受け止め、向こうも怒涛の剣劇を繰り出し、俺もそれを防ぐ。

そして、遂にシグナムに一瞬だけ隙ができた。

ここだっ！！

俺はずっと待ち望んでいた一瞬の隙をつき、シグナムに木刀を振るう。

もらったっ！！

だがその木刀は、虚しく空をきった。避けられたのだ。そして、それに全てを込めていた俺は、あっさりと一本を決められた。

「あゝ。負けちゃった」

仰向けに倒れて、そう呟く。しかし悔しいという気持ちよりは、清々しいという気持ちのほうが大きかった。一流の剣士と、全力でやりあえたんだ。剣を学ぶものとしては、これほど嬉しいことはない。

「最後のは、私も危なかったぞ」

そう言って、手を差し出してくるシグナム。

うん。こいつとはもう親友といっても過言じゃないな。

俺はその手を取り、立ち上がった。

「銀くん、すごいね……」

「ああ。あのシグナムと、互角に渡りあいやった……」

私は銀くん（銀時のあだ名）の力を見て、驚きを隠せなかった。強いとは聞いてたけど、ここまでなんて。

「これは鍛えがいがあるかな……」

私は、今からどうやって銀くんを鍛えるかを考え始めた。

あー、楽しみだなあ。

その3 剣士と侍（後書き）

え、ちょっと応募を求めたいと思います。

まず一つ目が、木刀とブレスレットの名前です。全く決めてませんはい。

ですので、皆様がいいと思う名前を募集しますっ！その中から、あの二つの名前を決めたいと思います。

期限は、ファーストアラートの終わり辺りまでにしたいです。星と雷に入るまでには決めたいので……

感想のリクエストの欄に、希望の名前を入れてください。

二つ目ですが、オリジナルボックスの能力、または名前です。こっちも全く決めてないんです。ですので、こちらにも応募します。炎の属性や種類は一切問いません。なんなら、複合した炎（獄寺のC・A・I・みたいな）でもいいです。こちらの方の期限は特に問いません。ただ、後になれば成る程、必殺技みたいな感じなのでないと出せなくなると思いますが？

こちらの方も、感想のリクエストの欄に書き込んでください。

後、前回も言いましたが、ヒロインが誰がいいか投票しております。そちらのほうも、できれば投票して頂くとありがたく感じる所存です。期限は、機動六課の休日が始まるまでです。

取り敢えず報告は以上です。

これから大空を舞う黒き侍をよろしくお願いします。

その4 初日終了

シグナムとの熱い戦いが終わり、あの後軽く隊舎の中を案内してもらい、今はなのは、ヴィータ、シグナム、フェイト、はやての五人と夕食を食べていた。

男連中の殺意の目なんて気にしない気にしない。

「じゃあ、あのジュエルシードってのは、ロスト・ログアだったのか……」

俺はなのは達から、昼間拾ったジュエルシードが、どれだけ危険なものかを教えてもらった。いや質にいれなくてホントよかった。

「で、私たちは今日、銀ちゃんが拾ってきたジュエルシードの出所を探ってんけどな」

あゝ、成る程。てかそりゃそうか。保管されてるはずの危険なものが草むらに落ちてたんだ。調べないほうがおかしいか。

「どうやら、展覧会に輸送されている途中に盗まれたものみたいな」

「は？なら何であんなところにあつたんだ？」

「多分、盗んだ後に、ばれそうにない場所に一旦置いた後、回収するつもりだったんだと思う」

ああ。要するに忘れた頃に安全に回収するつもりだったと。まあ、

あんなもん持って逃げてたら、すぐに捕まるだろうな。

「んじゃあ、俺ってもしかして結構お手柄だったりする？」

「ん〜。まあせやな。銀ちゃんのおかげで、被害もでんですんだし」

「なら報酬をよこせ」

「うわっ！ものすごいがめついなあんだっ！！」

「うるせえっ！俺こっち来たばっかで金ねえんだよっ！」

金がないと欲しいものも買えないっ！！

え？何が欲しいって？

んなもんPSPとDSに決まってるだろうがっ！！毎日徹夜でフィバーじゃあっ！！

……………そのたび命懸けで親父からゲーム機を守ったっけなあ。あの時はさすがに死ぬかと思っただぜ。

「……………」

あれ？何だか涙が出てきたよ？いや決してあの時のことに恐怖してじゃないよいやホント。

「で、金は？」

「少しは遠慮とかしいひんの？」

「俺の辞書にそんな言葉は存在しない」

「……………はあ。分かったわ。ちゃんと報酬はあげるで」

M A G I D E ?

「じゃあ、後で私の部屋に来てな」

「え？私室？」

「部隊長室に決まってるやろっ！！」

まあそんな風に、はやてと漫才まがいのことをしながら飯を食った。他の4人は若干呆れながら俺とはやてを見ていたが気にしない。

ああ、報酬ってなんだろうなあ〜。

「……………ナンデスカコレハ？」

「うん？自室の鍵と制服やけど？」

今いる場所は部隊長室。目の前にははやて。俺の手には、一つの鍵と制服があった。

その後、俺達の言い合いは、様子を見に来たなのは達四人の手によって、20分にも及ぶ激戦の末、なんとか収集がついた。

この決着は、いずれつけてやるっ！！

「で、これから銀ちゃんにしてもらうことやねんけどな」

騒動が一段落した所で、はやてが話を切り出した。報酬の件はもうどうでもいいや。

「取り敢えず、機動六課が活動開始するまでは、なのはちゃんに魔法を教わってな」

「へ？機動六課ってまだ活動してないの？」

「そやねん。部隊の皆が集結するまでの一週間。なのはちゃんに一对一で魔法を習ってな」

「ふむ。まあ習って損はないな。つか、習わないと損か」

「一週間後には、銀くんの他に四人のフォワード陣も加わるから、それまでに出来るだけ教えておきたいかな」

「分かった。まあ取り敢えず、明日からよろしく、なのは」

そうして、機動六課に来て最初の日が終わった。

はずだった。

「はやてちゃん。新しい人はどの方ですか？」

いきなり部隊長室に手のひらサイズの女の子が入ってきた。

「ああリイン。お仕事お疲れさんなあ」

「いえいえ。で、新しい人はどこですか？」

「この子やで。名前は坂田銀時」

「初めまして銀時さん。はやてちゃんのユニゾンデバイス、リインフォース？です」

何かはやてとちっこのが話しているけど、今の俺の頭には入って来ない。

え、えーっと、何ですかこのファンタジーワールド全開みたいな不思議生物は？

この生物って、やっぱり……

「……………よっ」

「よ?」

「妖精だあああああああああああああああああああああああ
あああああああつつつ!!!!」

やつべえっ！初めて見たよっ！やつば普段はフキの葉の下とかに住
んでんのかな？うわっめっちゃ興奮してきたっ！！

「えっと、取り敢えず握手してください」

ゴツンッ

全員から手痛い突っ込みを受けました。だって仕方ないじゃん！
目の前に妖精がいるんだからさっ！！

「リインは妖精じゃないのですっ!!」

「ああ、こりゃ失敬……って、どう考えても妖精だろっ!!」

~~~~~（説明中）~~~~~

「ふええ〜。デバイスってこんなものもあるんだな」

まじまじとリインを見る。

「あんまり見られるとちよつと照れるですよ」

「ああ、悪い」

リンにそう言われ、一旦深呼吸する。

「んじゃ改めて自己紹介。俺は坂田銀時。あだ名は銀さん、銀ちゃん、銀くんと様々。キャプテン志望してます。よろしく」

「はやてちゃんのユニゾンデバイス、リンフォース？曹長ですよ。よろしくなです」

「あれ？誰も突っ込まないのっ！？」

くっ！皆冷めた目で見てきやがるっ！！はやてだけは俺の状況を楽しんでやがるが……

そんなこんなで、今度こそ最初の日が終わった。

はずもなかった。

「……………はやてっさん。何すかこれ？」

「君の部屋やけど？」

「いやいやそれはわかるんですがね？何で女子寮に俺の部屋があるかって聞いてんだよこのすつとこどっこい」

そう。今俺ははやてに案内された部屋にいるのだが……………何故かその部屋は女子寮にあった。

「それは嫌がら……………男子寮に余りの部屋がないんよ」

「うおいっ！今絶対嫌がらせてって言い掛けたよなっ！？言い掛けたよなっ！？」

「じゃあ私はこの辺で」

そう言うてはやては、イチローも真っ青な速さで逃げて行きやがった。

魔法なしでの身体能力っ！？これがギャグ補正って奴か。恐ろしい……………

てか俺、マジでここな訳？

俺は現実って奴に打ち拉がれ、跪く。一緒に来ていたリンが慰めてくれたが、その言葉が耳に入ることにはなかった。

「あゝ疲れた」

そう言いながらベッドにダイブ。

その後仰向けになり、自分の指についたリングを見る。

うゝん。このリング、まるで虹みたいだな。よし、これを“虹のボングレリング”と名付けよう。

俺はリングに炎を灯すイメージをしたが、やはり駄目だった。

「なあ斬月」

「何だ？」

「やっぱり炎を灯すには、“覚悟”が必要なのか？」

「そうなるな」

「エネルギー源はやっぱり死ぬ気の炎？」

「少し違うな」

「なら、斬月を使う時は、霊力を使ってるのか？」

「いや、それも違う。ちょうど良い。私を知る範囲で、汝に教えよ

う」

「頼む」

「まず、リングとボックスだが、リングからでるものは死ぬ気の炎だが、そのブレスレットが、死ぬ気の炎を魔力に変換して使うようになっている」

「それってボックス使えるのか？」

「そのように改良されている」

「ふん。じゃあ斬月は？」

「私はもとより、魔力によって動くようになってる。霊力は一切関係ない」

「卍解は？」

「原作と同じ方法だと言えば、分かるか？」

「……………最悪じゃん。虚化は？」

「それも然り、だ」

「……………はあ。こりゃ一筋縄じゃいかねえな」

そう呟いた後、俺は眠りについた。五秒で寝れたさ。





#### その4 初日終了（後書き）

前回に続き、応募を募集中ですっ！

？木刀とブレスレットの名前。

？オリジナルボックスの能力。

そして、？ヒロインを誰にするかっ！！

？はファーストアラートが終わるまでに。

？の期限は特にありません。

？は機動六課の休日が始まるまでとさせていただきます。

応募及び投票待ってますっ！！

## その5 狸のイタズラ

あれから一週間が経ち、はやてが皆の前で挨拶している。

え？話進むの早すぎだろって？

気にすんな。

それにこの一週間、あったことと言えば特訓、特訓、特訓。

ちよっと回想をいれてみよう。

シグナムの場合。

「はあああああああああああああつ！！！」

「どわあああああああああああつ！！？」

シグナムが振るうレヴァンティンを、斬月を使って死に物狂いで防ぐ。

「どうした銀時っ！！お前の实力はそんなものかつ！！」

「無茶言っんじゃないっ！！」

「問題無用っ！！」

「ぎゃあああああああああああああああああああ  
あっっ！！？」

ドガアアアンッ！！（紫電一閃で爆発する音）

俺、黒焦げ&戦闘不能。

ヴィータの場合。

「うおりいやあああああああああああああああああ  
っ！！」

「だあああああああああああああああああああああ  
っっ！！」

ヴィータの迫り来るハンマーを、初日になのはから教えてもらった  
基礎中の基礎、プロテクションで死ぬ気で防ぐ。

「おらああああああああああああああああああっ！  
」

「ノオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

ツッ!」

ハンマーでプロテクションごと吹っ飛ばされる。

その繰り返し。足腰立たなくなるまでやった。

次の日筋肉痛になったが、容赦なく同じことをさせられた。うん、そのうち確実に死ぬな。

フェイトの場合。

フェイトなら優しくしてくれるはずだっ!!

鬼教官達のことを頭に浮かべながら、目の前の天使の言葉を待った。

「じゃあ、早速始めようか」

そう言つて、何故かバルディッシュを構えるフェイトさん。

「……………一応聞くけど、何を?」

「模擬戦」

その後のことは聞くな。思い出したくないから。

なのはの場合。

初日に基礎を教えてもらって以来だが、その初日の時点でののはが鬼教官なのはすでに分かった。

さて、今日は何かな？

「じゃあ早速、模擬戦をするよ」

もういやだ。

そんな一週間を送ったさ。何？よく死ななかったなって？自分でもびっくりだよ。

まあそんな超高密度の特訓のおかげで、ある程度は戦えるようになった。つつても、空を飛べる訳でも、月牙天衝を使える訳でもないけど。ただ単に基礎の魔法と、魔力のコントロールとやらが少しかるようになっただけ。

今日は特訓の成果を見るらしいが……早すぎね？

まあそんなことを思っていたら、はやての演説は終わった。

「ナイス演説」

「ありがとう」

そう言うてはやてとハイタッチ。この一週間で、六人とは結構仲良くなつた。

まあほとんど訓練繋がりだけだね。

因みに、俺の服装は、ネクタイはしめてないし、前は全開で、中に着ている赤いＴシャツが見えている。腰には木刀とベルト、腕にはブレスレット、首には斬月。フル装備だ。

服装のことは、シグナムからこっぴどく叱られたが、公式の場以外でならオツケーとはやてから許可をもらった。

「じゃあ銀ちゃんは、これからなのはちゃんと一緒にフォワードのメンバーに会ってきてなあ」

「りょーかい」

「で、フォワード陣は？」

「もうすぐ来るはずだよ」

「どんな奴らなんだ？」

「それは会ってみてからのお楽しみ」

「ケチ」

そんな会話をしながら、フォワード陣を待つてると、四人の男女が近づいてきた。

「あつ、来たよ」

「そうだね」

なのはの言葉に、適当に答える。今の俺はそれどころではないのだ。

この一週間の特訓の成果を、今日見られるとなると嫌でも緊張する。

おまえはそんなに肝っ玉が小さくないだろうって？

だったら聞くけど、ミスったら鬼教官どもが“O H A N A S  
H I”、とやらが待つてるんだぞ？

緊張するなつて無理だろそれ。

「あわわわわ……」

想像しちまったじゃねえこよコンチクショウ。

ま、まあ今は目の前のフォワード陣に注目しよう。

「皆来たね。スバルとティアナはともかく……そっちの二人は？」

「初めまして。エリオ・モンディアル三等陸士であります」

「初めまして。キャロ・ル・ルシエ三等陸士と、飛竜のフリードリヒであります」

「きゅくる〜」

………何ですかこの不思議生物？てかめっちゃ可愛いんですけど。抱きしめていい？

「あ、はいどうぞ」

キャロからの許可ももらい、抱きしめるのはさすがにしなかったが、頭を撫でてみたら、きゅく〜と鳴いた。やっべ。マジで可愛い。

「えっと、なのはさん。その人は？」

「ああ。彼は……」



「いや待った。自己紹介くらい自分でやる。俺の名前は坂田銀時。あだ名は銀さん、銀ちゃん、銀くんと様々。キャプテン志望で只今リハビリ中。よろしく」

「「「「……………」」」」

「ごめんなさい。後半の言葉は忘れて」

頭を下げる時間は、初動からわずかコンマ01。どんどん速くなっていることに関しては気にしてはいけない。俺の人権とかのために。

「で、おまえら二人の名前は？」

俺は青髪の、少女って言うよりは、少年に近い顔立ちの子と、見るからにツンデレ気質がプンプン漂っているオレンジのツインテールの子に聞いた。

「ティアナ・ランスター二等陸士です。よろしくお願いします」

「スバル・ナカジマ二等陸士です。よろしくお願いします、銀さん」

「っ！」

やっべ。不覚にも感動しちゃった。だってしょうがないじゃん。初めて“銀さん”って呼ばれてんだもんっ！！憧れてたんだからいいじゃんっ！！

「てか、俺ってお前らの同僚みたいなもんだから、ため口でいいぜ。年も同じくらいだろうし」

まあ、本当の俺の年齢は19歳なんだが、ファッキンな神様というより悪魔みたいな奴のせいで、只今の年齢は16歳です。

「うんわかった。よろしくね銀さん」

くっ！何てええ子なんやスバルッ！あつ、はやての口調がうつったかも。

まあ軽く自己紹介も終えたので、俺達は訓練場に向かった。

~~~~~  
(フォワードVSガジェット？型)~~~~~

フォワード陣がガジェットとやらを倒して戻ってきた。

「で、次は俺の番？」

「そうだよ。あのガジェット？型を倒してね」

「魔法初心者に無茶言っなよ……」

どうやら検査では、俺の魔力はニアスクラスらしい上、この先も増えるらしいが、使いこなせなければ宝の持ち腐れな訳で、魔法知ってから高々一週間の俺にそれを求めるのは無理ですよと。

「頑張ってね」

なのはさん。お願いだから話聞いて。

そんな俺の願いも虚しく、俺の目の前にガジェットとやらが現れる。
数は八。

「はあ。やるしかないか……」

俺は斬月を握り、叫んだ。

「叫べっ！斬月っ！！」

俺の服が、死覇装に変わり、背中には身の丈ほどある三日月型の刀、斬月。

俺は斬月は手に取らず、変わりに木刀を右手に取り構える。

すると、ガジェット達が俺に向かってきた。逃走するんじゃないのかよっ！！

俺はまず始めに向かつてきたガジェットに、木刀の一撃をたたき込む。だがさすがにそれでは壊れない。せいぜい装甲がへこむ程度だ。

だが、それがどうしたア
アアアアアアアアア
つつつ！！！！

「でりや ああああああああああああああああああああああ
ああっつ！！！」

連続で、一瞬のうちに何度も同じ場所を叩き、装甲が剥げた所でそこに木刀をねじこみ、そこからガジェットを真つ二つにし、離れる。

ドガアアアンッ！！

一瞬後に、ガジェットが爆発する。

「なっはっはっ！どうだあっ！！みたかあっ！！」

子供のようにはしゃぎ、木刀を上に向けて高笑いする。

「こらああああーーーーーっ！！ちゃんと魔法を使いなさああああーーーーーいつ！！」

なのはから注意を受ける。おっと。そーいやそうだった。あまりにも必死だから忘れてたぜ。

「汝は本当に大丈夫か？」

「大丈夫だよ。それより行くぞ」

俺は木刀を腰にしまい、今度こそ斬月に手をかける。

「まずはあれだ。演算と魔力調整よろしくっ！」

「承知」

俺は右手に斬月を持ち、左手を前に向ける。

そして詠唱を始めた。

「君臨者よ 血肉の仮面・万象・羽ばたき・ヒトの冠す者よ 焦熱と争乱 海隔て逆巻き 南へと歩を進めよ」

俺は、この一週間で魔力をある程度使えるようになった。その影響なのか、鬼道がほんの少しだけ使えるようになったのだっ！！

「破道の三一・赤火砲っ！」

赤い火球が、ガジェットに向かう。

どうだっ！？

しかし、その火球は、ガジェットの手前で、見えない壁みたいなものにぶつかり、消えてしまった。

うそん。

俺は恐る恐るなのは方を見る。

うわあ。もっと考えて使えって顔だよあれ。

鬼道については、俺には変換資質が多量にあるということ、無理矢理押し通した。はやて達は滅茶苦茶怪しんでいたけど……

……いずれは話さないといけないかもな。転生の部分だけは是が非でも話すわけにはいかないが。

まあ取り敢えず、今は目の前のガジェットに集中しよう。

……そうだっ！あれやってみようっ！

「斬月、あのな……」

俺はガジェットが放つレーザーを、避けたり斬月で弾いたりしながら、斬月に俺の完璧に思いつきでしかない作戦とも言えない作戦を話す。

「……………正気か？」

「ったりめーだ」

「成功するのか？」

「じゃなきゃ言わねえよ」

「……………よかるう。付き合ってやる」

「さっすが相棒。そこなくっちゃね」

俺は一旦、ガジェットから全力で離れる。それを追ってくるガジエット。

えっと……………あつ、あそこがいいな。

俺はちょうどいい場所を見つけ、そこ目がけて走りだす。

そこは、普通より、ビルとビルの間が少し空いた隙間だ。

ちょうど、人が五人並べるくらいの隙間。

俺は左手に魔力を集中させ、それを前に突き出し、叫んだ。

「縛道の三七・吊星^{つりぼし}っ！！」

魔力でできた床が、五方向に広がり、ビルにくつつく。俺はその床にドロップキックの要領で足から突っ込む。

そしてそのままランポリンの要領で、弾かれそのままガジェットに向かう。

その勢いを利用し、斬月でガジェットを貫く。

ドガアアアンッ！！

やったっ！今度こそちゃんとやったぞなのはっ！

上を見ると、驚いているフォワード陣とシャーリー、それに満足そうに笑っているのはがいた。

「よっしゃあっ！！続けていくぜえ、相棒っ！！」

「全く……ずいぶんとお調子者のパートナーを持ったものだ」

ふてくされたように言うが、万更でもなさそうな声音の斬月。

俺はその事が嬉しかった。

ああ。出会って間もないけど、もうこいつは俺にとって、大切な存在になっちゃってるんだなあ。

俺はそう思った後、気合いを入れ直した。

よっしゃっ！せっかく認めてもらえたんだっ！それに恥じない戦いをするぞっ！！

「づ、づがれだ……」

俺は、グロッキー状態になるまでしごかれたフォワード陣と別れ、自室に向かって歩いていった。

「情けないぞ銀時。それでも私のパートナーか」

うゝん。斬月に名前を呼ばれるのも、パートナーとして認められたのも嬉しいんだけど、前より遠慮が無くなったような……

「そいつはすいませんねえ……」

木刀を杖変わりにして歩く。

うう。悲しくなってきた。

明日からは、シグナムが俺を鍛えるとか言ってるし。ヴィータもなのはもめっちゃノリノリだし。

こんなの親父の訓練と同じくらいの拷問じゃねえかよ。

かと言って、頼れる人間などいない。

フェイトもシグナム程ではないとはいえ、軽い戦闘狂だし、はやては面白がつて止めないし、シャマルも同じく止めないし、リインじや抑止力としては弱く、ザフィーラは犬だから論外。フォワード陣に頼るのは論外。よつて、止める者なし、頼れる者なし。敵と戦う前に死ぬんじゃないやね？いやホント。

「ええ ええええええええええええええええええええええええ
つ！？」

俺がそう思いながら、自室のドアを開けようとしたら、いきなり横から叫び声があがった。

なんだなんだと思いつながら声の方を見たら、スバルが口をあぐりと開けながら、こっちを見ていた。

「どしたスバル？」

俺がそう言つと、震える指でこちらを指してきた。

こらこら。人に指を指すんじゃないありません。

「な、なな何で銀さんが女子寮に？」

あゝ、成る程ね。

まあそりやそうか。なのは達の反応も似たようなもんだったしなあ。

〽一週間前〽

「ふあゝあ」

俺は六課での初の朝を迎えながら、大あくびをした。

その後、歯を磨くために洗面所に向かった。すると、そこには先約がいた。なのはとフェイトだ。

「おはよー。なのは、フェイト」

俺がそう言うと、二人は驚いた顔でこっちを見た。

？どした？

……………まあいいか。

俺は気にせず蛇口を回そうと…………

「なつ、何で銀時がここに？」

したがフェイトの言葉で動きを止める。

イマナンテイイマシタカ？

俺は壊れたブリキのオモチャの如く、ギギギ、と顔をなのはとフェイトの方に向ける。

「二人とも、はやてから聞いてないのか？」

そんなわけないと思ったが、二人は首をふる。

…… やつてくれるじゃねえか、あのチビ狸イ。

その後、後から来たシグナムに斬り掛かれ、ヴィータからは殴り掛かれ、誤解が解けるまで二人にぼこぼこにされた。

その後全員ではやてに抗議をしたが、何やらはやてが俺以外の奴を脅し、味方がいなくなつたので仕方なく諦めた。脅した内容は、何やら秘密をばらされなくなつたら、みたいな感じで脅してた。気になつたので聞いてみようとしたら、四人から物凄い剣幕で睨まれた。そのせいで聞く気は失せた。

まあ、そんなこんなで、今も絶賛女子寮暮らしなんだけど……やっぱ慣れねえ。

その事を説明し終わると、何故かスバルは更に驚いた顔をした。なじめ？

「どしたスバル？」

さすがに気になるぞその反応は。

「あ、あの……」

スバルがおずおずと話し始めた。

「そこ、私の部屋でもあるんですけど……」

ハイ？

「スミマセンスバルサン。ヨクキコエナカタノデモウイチドイッテクダサイ」

「だ、だからそこ、私の部屋でもあるんだってばっ！」

スバルが顔を赤くしながらそう言う。

え、え、え、つと。つまりこういうことか？

スバルと同居。 何故？ 部屋割りを決めた奴がそうした。 誰が決めた？ 部隊長であるはやて。

「あんのクソチビ狸がアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツツツツ
ッ!!!!!!!!!!!!!!」

俺は喉が裂けんばかりの叫びをあげた。

その後、ニヤニヤしながら部隊長室で待ち構えていたはやてに、サブミッションを食らわせ、「部屋割り変えないとこのまま殺る」と言ったら快く変えてくれたさ。スバルはティアナの部屋に、俺は元

通り一人部屋になった。

てか、これからもあの狸のイタズラは続くのか？

「……………最悪だ」

「同感だな」

全く嬉しくないことで以心伝心した俺達だった。

その5 狸のイタズラ（後書き）

お読みいただきありがとうございますっ！

ではこの小説の主人公である、坂田銀時より、前々回あたりから続く応募を発表いたします。じゃ、後任せたから。

銀時

「丸投げかよっ！まあいいや。え〜っと、この小説では、俺の使ってる木刀と、ブレスレットの名前を募集中だ。期限はファーストアラートの終わりまでな」

銀時

「二つ目は、あのくそつたれな神様が、考えなしに送ってくれたオリジナルデバイスの能力と名前を募集中だ。なるべく俺の戦力がアップするのを考えてくれな」

銀時

「三つ目はヒロイン……って、これ俺が言わないといけないのかっ！？滅茶苦茶恥ずかしいんだけどっ！？」

いいからやれ。

銀時

「てめえ……他人事だからって……」

他人事だろ？いいからやれ。じゃないと、あの神様呼んでくるぞ。

銀時

「それだけはっ！……ったく。わかったよ。この小説のヒロインを募集集中だ。まあつまり、俺と結ばれるキャラクターを投票してくれ。期限は機動六課の休日までだ………これでいいのかコンチクシヨウ」

ご苦労

銀時

「……え？終わり？もつとなんか辛いとかないわけ？」

ない。

銀時

「……ふっ」

ふ？

銀時

「ふっざっけんなあああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああっ！！！」

でわまた次回へ。

銀時

「無視すんなあああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああっ！！！」

その6 街案内（前書き）

その6、テイクオフ！

銀時

「……………それだけ？」

その6 街案内

機動六課起動から三日後、突然午前からは休みだと言われてしまった。

さて、何をしようか。

取り敢えず、俺の容姿について書いておくか。髪の色はオレンジでツツツン頭。ボンゴレ？世に似ていると言われたことがある。目は澄んだ蒼。つり目だけど女顔。カッコいいよりは可愛いとよく言われる。身長168。体重49。スリムで筋肉質な体型。

使用デバイスは、インテリジェントデバイスの斬月。カートリッジシステムは使えないらしい。ポジションはFA。

まあこんなもん？

そんな感じで、俺はやることもないので部屋でゴロゴロすることにした。

「……やっぱ灯らねえか」

虹のボンゴレリングを見てそう呟く。そもそも、覚悟ってのが、まだ今一わからねえ。

こればかりは、実戦でないとわかんないかなあ。

そんな風に俺がベッドの上でゴロゴロ転がりながら悩んでいると、扉がノックされた。

「銀時！。いるー？」

「模擬戦ならお断りー」

一応先に言っておく。せつかくの休憩時間。模擬戦^{リベンジ}という名の苛めに関わってたまるか。

「ち、違つよーっ！銀時、まだ街に行ったことないでしょ？だから案内してあげようと思って」

「模擬戦と疑って申し訳ありませんでした」

という訳で、フェイトに街を案内してもらつことになった。

「銀時。今日は私のメンテナンスの日ではなかったか？」

「あつ、そついやそうだった」

「土産話を期待している」

「何の？」

「無論、フェイトとのデートのだ」

「………は？」

「何言つてんのお前？」

「む？違つのか？」

「当たり前だろうが」

「ふむ。年頃の男女が、二人で出かけるのは、デートとは言わんのか？」

「……………」

言われてみれば確かにそうだな。でも、向こうは只の善意のつもりだろ。

てか、斬月段々フランクリーになってきたなあ。まあ、俺としては嬉しい限りだが。

「まあ、頑張つて来い」

「だから違うつての」

そういや、生きてた頃は彼女とかいなかったな。好きな奴とかもいなかったしなあ。告白されたことはあるけど。

まあ、親父の訓練の間の休憩時間のマンガとゲームだけが、俺にとつての楽しみだったからなあ。もうちょい勉強とか励めばよかったか？

そんな事を考えながら、準備を済ませて、斬月と木刀をシャーリーに預けた。シャーリー曰く、これらのデバイスについては謎が多いらしい。斬月には、まだ隠された力があるのは分かるが、その機能が読み取れないとか（まあ冗解と虚化だろうけど）、木刀に至っては一切使用用途がわからないので、一度徹底的に調べたいらしい。ブレスレットのほうは……あれ？忘れられてる？そっちのがいいけ

ど……

まあ、しばらくは斬月一本でやればいいだけだな。

俺は、フェイトとの待ち合わせ場所である隊舎前に行くことにした。

「……………すっげえ」

俺は啞然とした。何故？

19歳のはずのフェイトが何か滅茶苦茶立派な車持ってたからデスヨッ！！

何これ？ひょっとしてフェイト金持ち？

いやいや。念のために聞いておかないと。

「この車、フェイトの？」

「うん、そうだよ」

笑顔で肯定と来たか。

「……………フェイトってブルジョア？」

「えっ？ち、違うと思うけど……」

「うっそをおっしゃいっ！！金持ちなら金持ちと言えっ！！あ、お小遣いくれない？」

「駄目」

くっ！駄目か……

……自分で言うのも何だけど、俺って最悪だなあ。

「銀時は、何か欲しいものとかある？」

「ゲームに漫画」

首都、クラナガンを歩きながら、フェイトが聞いてきたのを即答すると、呆れられてしまった。

「しゃあないじゃんっ！欲しいんだからっ！！」

「んじゃあ……服、かな？」

俺って私服はこの世界に初めて来た服（今現在着ている）しか持っていないからなあ。

なのでそこんところ何とかして欲しかったりする。

「じゃあ、私が選んであげるね」

「フェイトみたいな美人に選ばれるなんて、世の男が聞いたら嫉妬の炎を燃やすだろうなあ」

俺がそう呟くと、フェイトは真っ赤になって否定した。意外と、ていうかまんまうぶなんだな。まあ俺も言っておきながら恥ずかしかったりする。

にしても、普段すっかりしてるからか、こういうフェイトを見るのは新鮮だなあ。てか、めっちゃ可愛いなオイ。彼氏とかいないのか？

「フェイトって、彼氏とかいないの？」

気になり何となく聞く。

「ええっ！？いつ、いないよぉ……」

「えっ！？マジでっ！？」

うつそーん。こんな美人なのにい。

「因みにはやて達は？」

「多分、いないと思うけど……」

「……………」

おかしすぎるぜこの世のなか。

「好きな奴とかいないわけ？美人なのに勿体ないぜ」

そう言うともた真っ赤になっちゃった。ありやりや。ホントにつぶ
だなあ。んで可愛い。

「くくくつ……………」

そんなフェイトがおかしく、つい笑い声をあげてしまう。

「な、何で笑うの？」

顔を真っ赤に染めて聞いてくる。

やばい。マジで可愛いすぎるこのヒト。

「い、いや………… フェイトがあんまりにも可愛いからつい……………」

そう言うともた更に赤くなった。流石にそろそろやめとくか。

「そ、そういえば、銀時には好きな人とかいたの？」

仕返しとばかりにそう聞いてきた。だが甘いぜフェイト。俺は初恋
もまだなんだからなっ！！

……………泣いてもいいですか？

「……………初恋もまだです」

取り敢えず、隠さず話した。何かここで話さなかったら負けだと思っただから。

「えっ？そうなの？」

「何だよ。俺のこと女たらしでも思ってたのか？」

だとしたら悲しいぜえ。そりゃ恋愛には少し憧れちゃいるが、女たらしみたいになりたいなんて思ったこと……………あつたようななかったような。

てか、悪友のナンパに付き合ったことがあつたなそういえば。

……………あいつ、あの時百人以上に声かけても失敗してたっけなあ。流石にあん時は同情したぜ。

しかも俺が試しにやったら一発成功して、血涙流しながら俺を睨んでたし…………

ホントにあん時は同情したなあ。御愁傷様って感じ。

「そ、そんなことないんだけど……………」

「そういうフェイトの初恋は？」

「え、えっと……………まだ」

……………マジで勿体ないな。世の女の何割がこの美貌に嫉妬するのや

ら。

まあそんな風にフェイトをからかいながら、服屋に向かった。

帰ったら恐ろしいことが起こりそうだぜえ、Whooooooooo

……

「ふっふっふっ。中々ええ雰囲気やなあ」

只今私は絶賛銀ちゃんとフェイトちゃんのデートを盗聴中。

隣には呆れているのはちゃんとリイン。二人の視線なんて無視や無視。

「はやてちゃん。これって盗聴だよね？」

「ちゃうよちゃうよ」。新人隊員と隊長が、ちゃんと親睦を深めるかどうかの確認よ」

ニヤニヤしながら言うと、二人は諦めたようにため息をつく。

でも二人ともここに残るってことは、聞く気は満々やね。

「え、えつとお……」

「にゃ、にゃはは……」

笑って誤魔化しよったか。まあええわ。さあて、続きを楽しみますかあ。ムッフッフッフウ。

「はやてちゃん、それヒロインの笑い方じゃないよ？」

気にしないで私はっ！！

「うーん、これもいいかなあ」

誰か助けてください。

何でだと？

服屋に来てからずっとフェイトが服を持ってきては着せ、持ってきては着せの繰り返しだっ！！

もう三十くらいいったんじゃないですかねえっ！？え？実際は十着くらいだっ？気分の問題なんだ気分の。

とまあそんな訳で、店についてから既に一時間近く経つことになる。

はあ、早く終わんないかなあ。すでに俺グロッキー状態なんだけど………女って何で平気なんですか？

その後、更に二十着程着せられ、魂が抜けたようになった俺とフェイトは、昼食を食べに行くことになった。

うう……来なきゃよかったかも。

「何か言った？」

心を読まれたっ！？

「イエナニモ」

これからは注意しないとな……

フェイトのオススメの店で昼食をとり、そろそろいい時間なので、そろそろ帰ろうかと思った時、俺はフェイトに待っていて欲しいと頼み、ある場所に向かった。

そこは、デパートの一角にある、ぬいぐるみのコーナーだったりする。

だってさだってさっ！やっぱりお礼くらいはしたいじゃんっ！？でも女が何貰って喜ぶかなんて俺わかんないもんっ！！

「うーん……どうせだったらやっぱ可愛いのがいいよなあ……よし

っ、これにしよう」

俺の掴んだぬいぐるみは、狼みたいな可愛い奴だ。この時の俺は知らなかったが、このぬいぐるみは、フェイトの使い魔のアルフという奴にそっくりらしい。

まあそんな訳で、後はフェイトの所に戻り、今日のお礼を言うだけだ。

俺は鼻歌を歌いながら、デパートを出ようとしたが、周りがおかしいことに気付く。

出口に我先にと向かっているのだ。

「どうかしたんですか？」

気になったので人に聞いてみた。

「お前放送聞いてなかったのかっ！？五階で火事があったんだってよっ！！」

「っ！？」

マジで？しかもこの人達の慌てよう。そうとう火の勢いが早いんだな。

ここは三階。俺は今は一応公務員だが、今はデバイスも何もない、一般人より少し動けるレベルだ。俺も避難した方がいいな。

そう思い、人の波に乗ろうとしたら、人の波に逆らって、上に向か

おうとしている女性を目にいれてしまった。

俺は内心で舌打ちした後、その女性のもとまで駆け寄った。

「何やってるんだあんたっ！」

俺はそう叫んで、女性の腕を引っ張り、人の波からでる。

「離してっ!!」

「バカかつ!上は火の海だぞっ!!」

「だって……あの子がつ……あの子がつ!!」

まさか上に誰か取り残されてるのかっ!?

………てか、今の俺には助けになんていけないよ?

だって今は何も持っていないもん。

なら助けに行かないのかって? バツカお前そんなもん………

「その子の特徴と名前は？」

助けに行くに、決まってるだろうがっ！！！

その6 街案内（後書き）

応募と投票待ってますっ！

銀時

「ちゃんと説明しろよっ！」

いやあ、だってさあ。もう何回もやってるし一回くらいさぼっても

……

銀時

「いや駄目だろっ！ちゃんとやれよっ！」

では前回に続き銀時くん、どぞ。

銀時

「また丸投げっ！？……まあいいや。応募は俺の木刀とプレスレツトの名前と、オリジナルボックスの能力＆名前。前者のほうはファーストアラートが終わった時点で締め切り予定だ。それから投票は、メインヒロインを誰にするか、だ」

おっ、今回は恥ずかしがらずに言えたな。

銀時

「まあな。二回目だし」

ちっ、つまらん。

銀時

「てめえ殴らせろやコラ」

それではまた次回。

銀時

「だから無視すんなっ！」

次回予告。

火事の現場に、何も持たず一人で突っ込んだ銀時。

火事に取り残された女の子。

必死に走り回り、名前を叫びながら探す銀時。

そして、やっとの思いで女の子を見つけた銀時の瞳に、最悪の光景が映った。

対するフェイトは、火事の現場に向かい、たどり着いた時に驚愕の光景が待っていた。

果たして、銀時とフェイトが見たものとは？

こんな感じ？

銀時

「いや俺に感想を求めるなよ」

その7 目覚める覚悟（前書き）

テイクアウトっ!!

銀時

「テイクオフな。後、つまんないよそれ」

（・・）ゴメン

その7 目覚める覚悟

「だりゃあっ！！」

俺はそう叫んで、五階の防災扉を蹴破った。炎のせいか、扉がかなり傷んでいたおかげか、簡単に破れた。

さて、ここからが問題だ。

周りは既に火の海だ。あの後女性の人にフェイトにあげるつもりぬいぐるみを預け、子供の特徴を聞いた。取り残されたのは九歳の女の子。女性の娘。特徴は足元まで伸びた金髪のツインテール。名前はアリナ・エリクス。

九歳の子供が、こんな場所にいて長く保つはさすがない。急がないとっ！！

俺は息を大きく吸い込み、叫んだ。

「アリナちゃんああああああああああああああああああああんっ！！！！聞こえたら返事しろおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！！！」

喉が裂けてもいいと思う覚悟で叫ぶ。少なくともこの階全体に響いたはずだ。

これで向こうには、助けが来たということ伝えられた。

アリナちゃんは精神的に少しは楽になれるはずだ。

それに向こうも助けを叫んでくれるはず。

……まあ、それはあくまでもアリナちゃんに意識があり、助けを叫べる位の元気があったらなんだが。

って、こんなこと考えてる場合じゃねえっ!!

入り口には既に炎がまわっていて、助けに行くには炎の中に突っ込むという形になる。

今の俺は普通の服に身を包んだ只の人間だ。しかも体を水で濡らしていないから、大火傷する事は間違いないだろうな。

……………上等だ。

俺の覚悟なめんなよ。こんな火ごときにおじ気付く程、俺は……………

「弱くねえんだよおっ!!」

そう叫び、炎に突っ込む。

待ってるよアリナちゃんっ!!絶対に助けるからなっ!!

時は少し遡り、銀時がフェイトと別れてすぐの機動六課の部隊長室。

そこでははやて達が未だに盗聴していた。

「あれ？銀くんどこに行くんだろっね？」

なのはちゃんが、素朴な疑問を抱く。やれやれ。まだなのはちゃんはお子様やなあ。

「そんなん決まってるや〜ん。フェイトちゃんに、今日のお礼にプレゼントを買いにいったんやで〜」

これは確信に近い。何でか？だって銀ちゃんって滅茶苦茶単純やねもん。行動が手に取るようにわかるわあ。でも頭の回転は速いんよなあ。模擬戦とかでも信じられんような作戦をいつも使ってくるし……自由な発想からくるんやろっなあ。

まあそんなわけで、基本義理がたい銀ちゃんが、街を案内してくれたフェイトちゃんに、お礼をせえへんわけないねん。

「真っ直ぐなええ子やで……ホンマ」

だから、元の世界に戻してあげたいと思う反面、ここにずっと残って欲しいとも思う。

銀ちゃんが来てからは、私の周りは、元から賑やかだったのが、さらに賑やかになって楽しくなった。多分、そういう才能があんねやろっなあ。本人に自覚はないみたいやけど。

そんなことを考えながら、銀ちゃんの行動をなおも盗聴。

今、ぬいぐるみを買った所で、後はフェイトちゃんの所に戻るだけやなあ。

ふっふっふ。さあて、どういつ風に渡すか楽しみやなあ。

「あれ？何かおかしくない？」

なのはちゃんがいきなりそんなことを言った。

そう言われ、集中して聞くと、確におかしいことに気付いた。まるで人が何かから逃げるような音が……

『どうかしたんですか？』

盗聴機から、銀ちゃんが誰かにそう聞く声が聞こえた。

やっぱり何かおかしいねんな。

『お前放送聞いてなかったのかっ！？五階で火事があったんだってよっ！！！』

「っっっ！？」

私は息をのんでしまう。さ、最悪や……あの子はトラブるメーカーかっ！？

で、でもまあ、銀ちゃんなら、少しくらいの火事やったら大丈夫やろ。斬月もあるし……

「き、今日って確か、斬月のメンテナンスの日だったような気がするですう」

リン、その報告最悪すぎる。

ま、まあ銀ちゃんがいるのは三階。火事は五階らしいし、すぐに逃げれば大丈夫やろ。後は地上の陸士部隊に任せれば……

『何やってるんだあんたっ！』

いきなりの銀ちゃんの怒鳴り声。いやな予感しかしいひん。

『離してっ！！』

『上は火の海だぞっ！！』

『だって……あの子がっ……あの子がっ！！』

まさか上に人が残つとるんかっ！？

子ってことは子供かっ！？やとしたら陸士部隊じゃ間に合わんかもしれんっ！

急いでフェイトちゃんに連絡を……

『その子の特徴と名前は？』

………今、銀ちゃんは何て言った？

その子の特徴と名前は？って言ったか？

[illegible]

助けに行くつもりかいっ！

……てか、銀ちゃん性格やったら、そろそくなるわなあ。きっとデバイス持ってるかどうかなんて関係ないんやろなあ。

『アリナちゃんだな？絶対に助けてくるから、あんたは外にでてろ。あ、後これ預かっていてくれ』

あ、もう絶対火の海に向かって走りだしたな。

はあ。世話の焼ける部下を持ったなあ。

私は、そう思った後、急いでフェイトちゃんに連絡をいれた。

くれぐれも無茶はせんとつてや、銀ちゃんっ！

熱い……

額から滝のように汗が流れて、頬をつたい、顎から地面に落ちる。

くそっ！さつきからずっと叫んでんのに、全然見つからねえ……

このデパートは、階こそあまりないが、一階一階がとてつもなく広いのだ。

このままじゃ間に合わねえ……

俺だって長く保つわけじゃない。もう服は黒焦げてるし、体のあちこちに火傷を負っている。煙はなるべく吸い込まないようにしてるけど、所詮は気休めだ。

アリナちゃんの方はもっと時間がない。

早く見つけないといけないのに……

「はあ……はあ……くそっ」

このままじゃマジでヤバイ。だけど、現状で頼れるのは自分の体だけだ。このままやるしかねえ。

もう半分は探し終えた……大丈夫。助けられる。

そう思い、自分を奮い立たせる。

諦めることだけはしたくねえ。

「考えろ……考えろ……」

叫んで返事がないってことは、意識がないかそれだけ弱ってるって

ことだ。

なら、そうなる原因は……煙の吸いすぎ、火の熱、後は……

「……商品の下敷き」

下敷きになるような商品は……っ！！

おいおい。ちょっと俺閃ちやたよ？

俺はそう思いながら、急いでパンフレットの地図を開く。この階に上がる前に、四階で手に入れたものだ。もしもの時にとっておいたけど、よかったあ持ってきて。

そして、五階の欄のコーナーから急いであるコーナーを探す。

俺の探しているコーナーは、家具売り場だ。

一番可能性が高い場所だ。ここなら、下敷きになっていなかったとしても、家具が倒れて出られなくなってるかもしれない。

俺はその名前を見付け、場所を確認した。

最短距離までの道を頭にたたき込み、走りだす。

既に俺の体力は結構限界だ。だけどそんなの知るかっ！！

俺は、走る速度を更にあげる。

すると、最悪なことに行く先が炎に包まれていた。

「~~~~っ！！だああああもつつ！！！」

俺は覚悟を決め、更に速度をあげた。今の俺にだせる最大の速度で、炎に突っ込んだ。

そして、倒れこむように炎の向こう側の床に着地した。

「がつ、ああああっ……………っ！！」

俺は痛みあまりに悲鳴をあげてしまった。

ぐっ……………くそが。この程度でへばってんじゃねえぞ、俺の体。

震える腕を支えに、何とか立ち上がる。今のでまた火傷を負った。これ以上はさすがに……

「はぁ……………はぁ……………」

額から汗と一緒に赤いものまで流れてきやがった。

ついでに右腕はもう火傷のせいで使い物になりそうにないかも。

試しに右手をグーパーさせてみる。

うんよし動く。動かす時に激痛が走るが無視しよう。

「はぁ……………はぁ……………っ、着いた」

そして、ようやく俺は家具売り場に着いた。

うん。もうすごい位に家具が倒れてるね。例えるなら、ドミノ倒し
が終わった後のドミノみたいな感じた。まあ、要するに最悪な訳だ。
はつきり言つて、ここにいなかったら最悪だ。ここにいてつてのも、
あくまで俺の仮説の中で、一番可能性の高い場所を選んだだけだ。
ここにいて保障なんてどこにもない。

……だけど、今はここに事を祈るしかねえ。

俺は慎重かつ素早く家具をどかしながら、奥に進む。

[illegible]

ありったけの声で叫ぶ。もしいたら、頼むから返事してくれっ！

—

「え？」

今、かすかに声が聞こえたような……

「……だ……誰？」

擦れるような声が聞こえてきた。

ビンゴッ！！

「アリナちゃんかつ！？君の母親に頼まれて、助けにきたっ！！」

「っ！マ、ママが……」

「ああっ！だから居場所を教えてくれっ！！早くこんな場所脱出するぞっ！！」

「……で、でももう……」

「諦めるんじゃないっ！！そこに可能性が1%でもあるんだったら、必死にもがいて掴み取れよっ！！どんなにみっともなくても、諦めずに最後まで頑張れよっ！！死にたくないんだろ？ママにまた会いたいんだろ？なら諦めてんじゃないっ！！」

俺は声のするほうに向かいながら叫ぶ。

「本当に生きたいんだったら、泣きながら生きたいって叫べよっ！！絶対に、助けてやるからっ！！！！」

そう叫んで、前にあった家具を蹴りあげた。

すると、その向こう側に、家具が周りを取り囲むように倒れているせいで、動けなくなった女の子がいた。どうやら煙の吸いすぎで、声をあげるのも辛そうだ。

ようやく見つけたっ！！

そう、俺が安堵した瞬間だった。

女の子の後ろにあるドでかいタンスが、女の子に向かって倒れていくのは。

「っ！！」

女の子はそれに気づき、目を閉じる。

くそがつ！！

俺は地面を力の限り蹴った。

間に合えっ！

だが、今のままじゃ間に合わない。

くそっ、くそっ、くそっ！！

もっと早く動けよ俺の足っ！！

間に合わねえじゃねえかよっ！！

もうタンスが女の子を下敷きにするまでコンマ1秒もない。

何でだよっ！助けるって決めたのにっ！くそっ！！

守るんだっ！！絶対、絶対っ！！

「あああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああつつっ！！！！！！」

俺は力の限り叫び、アリナちゃんに向かって地をおもいつきり蹴る。

その瞬間、俺の両手首が光だした。

これは――

「はやて、それ本当っ!？」

私が、突然起こった火事の現場に来た陸士部隊の指揮官の人と話をしている、いきなりはやてから通信が入り、銀時が火事の中に突っ込んだことを聞かされた。

『ホンマやっ!上の階で子供が取り残されてるらしくて、その子供を助けに行ったっ!フェイトちゃんっ!』

「わかった。今すぐ私が助けに……」

「なっ、何だあれはっ!？」

「えっ？」

突然陸士部隊の方が叫び声をあげた。見ると、上を指差して固まっていた。

私も気になり、上を見た。

「なっ……」

私は自分の目を疑った。

視線の先は、未だに燃えているはずのデパートの五階。その部分が……凍っていたのだ。

氷結系の変換資質っ!?

あんな範囲でっ!?

一体誰が……

いや、今はそれよりも……

「私が行って確かめてきますっ! 皆さんは危険ですので、ここに残っててくださいっ!」

「わっ、わかりましたっ!」

「バルディッシュ」

「Yes Sir」

私はバリアジャケットを着て、急いで一階から五階まで登る。

本当は空から一気に行きたかったけど、公務員の私が公共物を壊すわけにはいけないので、仕方なく階段をのぼる。

一階から五階までを一気に走ってのぼるのは、訓練してるとはいえ少し疲れる。

「……………うそ」

私は五階に着いた瞬間、絶句した。

もはや火などどこにもなく、床や壁や商品の全てが凍っていた。

……………調べるのは後。今は銀時と子供を探さないと。

「銀時ーっ！ー！どこにいるのーっ！ー！」

しかし返事が返ってこない。

「……………広いから、声が届いてないのかな？」

私はそう言って、最悪の考えを頭から払う。

それはつまり……………

銀時の死。

まだ知り合ってそんなに経ったわけじゃないけど、それでも、銀時はもう私の友達だ。

死んでるなんて考え、絶対に持ちやいけないっ!!

カッン……カッン……

私が必死に銀時達を探していると、足音が聞こえてきた。

まさか銀時っ!?

私は急いで足音のするほうへ向かった。

「銀時っ!?!」

「……フェイトか?」

今、確かに銀時の声がした。私は銀時が無事だったことにホッとしながら、曲がり角を曲がった。

「っ!?!」

その瞬間、私は絶句した。

そこにいたのは、確かに銀時だった。銀時の背中では、顔色があまりよくない金髪の少女が眠っていた。

恐らくあの子が取り残された子供なんだろう。

そして銀時は、額から血を流し、あちこちに火傷を負い、息を荒くした満身創痍の状態だ。

それだけならまだわかる。

今の銀時は……

額から、オレンジの炎を灯していたのだ。

その7 目覚める覚悟（後書き）

銀時

「この小説では俺の木刀及びブレスレットの名前を絶賛募集中だ。期限はファーストアラートの終わりまで。次に俺のオリジナルボックスの名前及び能力も募集中。こっちの期限はなし。後最後に、ヒロインが誰がいいか投票中だ。期限は機動六課の休日が始まるまでっ！感想のリクエストの欄に書き込んでくれよなっ！ではまた次回――……」

ンなわけにはいくかいこのすつとこどっこいつ！！

銀時

「ちつ、来やがったか」

お前さては俺にからまれるのが嫌でさっさと終わらせようとしたな？

銀時

「（ギクッ）き、気のせいだろ。てか、からんでる自覚はあったんだな」

あつたりまえよおっ！！

銀時

「今すぐ消し炭にしてやろうか？」

超すいませんでした（土下座）。

銀時

「てか、もうやることやったから、俺は帰るぞっ!」

まあまあ。取り敢えず、今回からは途中経過も発表しようかと思つてさあ。

銀時

「いきなりだなオイッ! てか、投票入ってたのか?」

一票だけなっ!!

それでは、現在一位の発表を、主人公の口からどうぞっ!!

銀時

「現在一位は………おお、はやてかつ! まあ確かに、あいつとの漫才みたいなやり取り楽しいからなあ」

ではこのままはやてに一位でいて欲しいと?

銀時

「いやそこまでは言つてねえけど……」

バカモンッ!! そこははやてが一位でオツケーって言えよっ!!

銀時

「何でだよっ!?!」

お前とはやての会話が一番書きやすいからじゃボケエッ!!

銀時

「それってかんつつつべきにお前の願望だよな?」

あつ、もう尺ないのでまた次回っ!!

銀時

「無理矢理すぎるぞその誤魔化し方っっ!!!!」

祝PV一万突破記念っ！！第一回王様ゲームVS機動六課前衛メンバー（前書き

何となくで書いてみた小説ですっ！！

はつきり言ってギャグ以外なしっ！！

それでもよければ、どうぞっ！！

祝PV一万突破記念っ！！第一回王様ゲームVS機動六課前衛メンバー

これからやる物語は、本編とは一切関係ありません。設定上、既に参加メンバー全員が、銀時に惚れてることとさせていただきます。

それでは、どうぞ。

「第一回、王様ゲーム大会っ！！気になるあの子をゲットしようぜっ！！大会っ」

いきなりはやてがそんなことを言い出した。ああ、春にバカが増えるって本当なんだな。

「って、まずタイトルとかいろいろと突っ込む所があるやろっがっ！！」

バシンッ！

理不尽にはやてにギャグ補正能力を使って出した鉄のハリセンで殴られた。

普通なら流血沙汰だが、そこは俺もギャグ補正能力を使い無傷。ただし痛みはある。

因みに、今ここにいるのは、俺とはやて以外に、スターズ四人とライティング四人、そしてラインの計十一人がいた。

これから何すんのかと思えば、また下らないことだし……

そりゃあ、はやてのやることだったら、普段ならノリノリで乗ってやってもいいんだが、今は訓練が終わったばかり。はつきり言って、疲労がピークに達しているのだ。

そこに呼び出しを受けて王様ゲームって……

「あの……王様ゲームって何？はやてちゃん」

「あつ、私も知りたいかも」

なのはとフェイトがそんなことをはやてに聞いた。あんたら何でそんな純な存在なの？

てか、よく見たら俺とはやて以外は知らないっぽいぞ？

「…………ああ、そっか。ミッドチルダにはないんだな、うん。決して俺とはやてだけが病んでるんじゃないよな？」

「ふっふっふっ。王様ゲームって言うのはな、くじで王様になった人が、ゲーム参加者に何でも一つだけ命令できるゲームなんや」

「……………っ！！？」「…………」

およ？エリオとキャラとリン以外の目付きが変わったぞ？つか、めっさまがまがしいものになってるような……

ブラッドオブボンゴレがなくてもわかるっ！！

今すぐここから逃げないっ！！

「あゝ、そういえば今日は新作ゲームの発売日だあ。てなわけで、俺はこれで」

ガシィ

物凄い力でなのはに肩を掴まれる。

「駄目だよ銀くん。ちゃんとゲームに参加しないと」

ガシィ

反対側の肩をフェイトが掴む。

「レクリエーションみたいなものだし、ね？」

二人とも笑顔だ。多分十人中十人が一目惚れするような飛びつきり素敵な笑顔だ。なのに何故だろう。冷や汗しか流れないのは？

まあそんなわけで、エスケープに失敗した俺は、そのまま参加することになってしまったとき。

ルール

くじで王様になった人が、一度だけどんな命令でもできる（ただし、金銭や犯罪行為などは禁止）

王様は命令する際に、必ず番号で使命しなければならない

途中で逃げ出す、または命令を聞かなかった場合は、なのはのSTBをくらうことになる

くじを引く回数は六回。

……に、逃げ場がねえ。

右になのは、左にフェイト、膝の上にはやて……さらに周りには殺気を丸出しにしているスバル達。

お母さん、助けて。

「じゃあ、まずは銀ちゃん引いてや」

「あ、ああ……」

てか、お願いだから王様っ！！

俺はそんな思いを抱きながら、くじを引いた。

結果、
3番。

……さっ、最悪だ。

こうなりやエリキャロリンにかけるしか……

「やったあつ！私が王様つ！！」

後ろからスバルの喜びの声が聞こえた。

ははは。神は我を見放した。

「じゃあ、銀さんとキスッ！」

「番号を言ええええええええつっ！！！後、軽く爆弾発言すんなああああああああああっっ！！！」

何言ってんのこの子はっ！？

てか、自分の番号見られないように死守しなきゃっ！！！！

「ええ。じゃあ……」

ほっ。どうせスバルのことだ。もうさっきみたいなの無理難題を言う

「あ、私です」

キヤ口か。助かったあゝ。これで気苦労が減……

「八番の人、今から『あなたのことがチュキだから』っつ！
！っつて、力の限り叫んでください」

ファアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ツツクツツツ！！

だから何でミッド育ちのお前らが知ってたんだよっ！！！！

「八番誰やー？」

「はい」

「語尾」

「フリードリヒ・ヴェルヘルム・ニーチェッ……！」

「じゃあ、早速叫んでください」

満面の笑みで死刑宣告してくるキャロ。ああ、今はキャロの笑顔が死神の微笑みに見えるよ。

てか、やんないと死ぬんだよな、俺。

俺は覚悟を決めて、力の限り叫んだ。

「逃がさんでえ」

てか逃げねえよっ！！お前が俺の膝に乗ってるせいであ！！

「てかやだっ！！もう銀さんヒットポイント0だからっ！！これ以上はもう無理だからっ！！！！」

「心配せんでも、私はそんな無茶なこと言わへんよ」

そう言って、俺に微笑んでくるはやて。

ああ、お前は女神かつ！？頼むぜ女神はやてっ！！

今にして思えば、この時の俺は余程疲れてたんだと思う。はやての言葉を信じるなんて……by銀時後日談より

「四番の人がこの本を読んで」

ほっ。よかった。今回は本当にまともだ。しかも読むのは俺じゃない。大丈夫なはずだ。

「四番は誰やー？」

「あ、僕です」

エリオか。よかったなエリオ。ラッキーくじだぜ。

しかし、俺は本のタイトルを見た瞬間、そんな考えが吹っ飛んだ。
タイトルにはこんな文字が。

『エリオ×銀時』

この後のことは想像に任せます。

「……………はっ、こっはっ！！」

「語尾」

「フリードリヒ・ヴェルヘルム・ニーチェ」

もう馴れたさ。人って怖いねえ。

「もう最後だよ。四回目と五回目はもう終わっちゃった」

なのはが残念そうに言う。きつと一回も王様になってないんだろう。

さて、最後は誰だ？

「……………私です」

リンか。よし、何とか無事（？）に終わらせることができたぜえ。
これでやっと解放……

「十番の人、隊舎の周りを百周してくださいなのです」

……………ははは。

全く。十番の奴も不幸だなあ。

百周なんて、一体どれだけ疲れることやら……

「十番誰やー？」

全く、早くでてこいよなー。

「銀ちゃん、何番？」

「ん？俺か？フリードリヒ・ヴェルヘルム・ニーチエ」

そっぴや何番だろう？

……………十番。

いやいやいややつっ！！何かの見間違えだろっつっ！！

もう一度見る。

.....十番。

「なあ、何番なん？まさか十番とか？」

「.....YES、フリードリヒ・ヴェルヘルム・ニーチエ」

「.....え？マジで？」

「.....YES、フリードリヒ・ヴェルヘルム・ニーチエ」

泣いた。滅茶苦茶泣いた。精神的に徹底的に痛め付けた後に肉体的体罰。

ははは.....夢だ。こんなの夢に違いない。夢であってくれ、頼むからっ！！

「.....マジで夢？」

俺は辺りを見回すと、そこは見慣れた部屋だった。

「……………まさかの夢オチ？」

まあ、何にしてもよかった。あんなのが現実に起きたりしたら……

「銀ちゃん。王様ゲームやるでー」

「もういやあああああああああああああああああああああ
あああああああつつつ！！！！！」

その日の夜、心身ともにボロボロとなった俺は、一晩中枕を濡らした。

祝PV一万突破記念っ！！第一回王様ゲームVS機動六課前衛メンバー（後書き

感想待ってまゝす。

銀時

「いやだからちゃんと応募のこと話せよっ！！」

銀時 パース。後任せた。

銀時

「いつか殺す……………この小説では、俺の木刀とブレスレットの名前を募集中だっ！！期限はファーストアラートが終わるまでっ！！それに俺のオリジナルボックスの名前と能力も募集中っ！！こちらは期限なしっ！！最後に、この小説のメインヒロインが誰がいいか投票中だあっ！！期限は六課の休日までだっ！！全部感想のリクエストの欄に書いてくれよなっ！！」

はいよく出来ました。

銀時

「殴っていいか？」

やだ。でわまた次回。

銀時

「いつかぜってえ殺す」

その8 取り調べ（前書き）

今回はついにフラグが立ったっ！！

銀時

「ついにつてほどまだこの小説長くやってないけどな」

テイクアウトッ！！

銀時

「今のは焦りからきた間違いか、ネタとしてやったのかどっち？」

…………… テイクオフッ！！

銀時

「何か段々適当になってきたなあ。あ、始めからか」

その8 取り調べ

「……知らない天井だ」

「目覚めた第一声がそれ？」

俺の呟きに対して、呆れたような声が返ってきた。

「ああ……シャマルか」

てことはここは六課の医務室か……

多分、今のところ一番お世話になってるのは俺だ。

何故？

鬼教官もとの始めの一週間の訓練を思い出して欲しい。

もうわかる人はわかるだろう。つまりはそういうことだ。

「~~~~~っ!」

起き上がろうとした途端、あちこちから痛みが走る。

「ああ。まだ寝てなきゃ駄目よ。ひどい火傷なんだから」

「つつつ……わかった」

俺はシャマルの言うとおり、大人しく寝ることにする。

えっと……気絶する前に何があったんだっけ？

まだ半分寝ぼけてんな……

まあ少しずつ思いだすだろ。

「今、はやてちゃんに連絡したら、急いでここに来るって」

「騒がしくしないように言っといてくれ。今騒がれたら俺死ぬ」

「はやてちゃん、銀時くんがあなたの熱い包容が欲しいって」

「シャツマルさあああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああんっっ！！！！？」

何言っとするんじゃこの毒物使い（ポイズンマスター）はっ！？

因みに毒物使い（ポイズンマスター）とは、はやてから教えてもらったシャマルのあだ名。何故かは知らん。

「ふふっ。通信はもう切ってあるわよ」

「……………し、心臓が止まるかと思った」

怪我人虐める医者ってどうよ？

そんな感じで、毒物使い（ポイズンマスター）に虐められていると、医務室の扉が開いた。

「銀ちゃん、大丈夫か？」

「この生き遅れた医者のおかげで大丈夫じゃない」

ゴツンッ

今一瞬シャルマルの手が消えたように見えたのは気のせいだ。

「何や。全然大丈夫そうやな」

「まあ、頑丈なのが取り柄だからな。それより、今回俺ってお手柄だよな？」

「へ？ま、まあそうなるなあ」

「報酬よこせ」

「あの時の私の心配を返せっ！！」

ゴツンッ

「~~~~っ！！てめえっ！！それが怪我人にする事かっ！！」

「やかましいっ！！あの時一瞬でもあんたの事心配した私は何やっ
てええええええええええんっ！！！！」

「へ？心配した？お前が？」

「当たり前やろっ！！火事の中に突っ込んだ時はどうしようかと思
ったわっ！！」

はやてが怒ったように叫ぶ。だけど今の俺にはそれより気になるとがあった。

「はやて？何で俺が火事の中に突っ込んだ時のこと知ってるんだ？」

「（ギクッ）」

明らかに挙動不審になったはやて。上に立つものとしてこのわかりやすさはどうよ？

「は～～～や～～～て～～～ちゃ～～～ん～～～？」

「ぎ、銀ちゃん？あ、あのな……」

「正直に答えないとサブミッション」

「フェイトちゃんとのデートを盗聴しましたあっ！！」

一瞬で盗聴をしていたことを白状した。

「ほおお。盗聴してた、とな？」

「い、いやあの……ほんの出来心でやったことで……」

「言い訳は聞かん。目を閉じろ」

「えっ何すー」「早くしないとサブミッション」「ー直ちにっ！！」

目を瞑って来るであろう痛みに備えるはやて。横ではシャマルが心

配そつに見ている。

「よし。ではこれより貴様に裁きをくだすっつー!」

「っ!」

ペチン

「あいたっ!」

「はいしゅくりょ」

驚いた様子で、涙目のはやてがこつちを見ていた。

うわあ。こいつも何っーかこうしてると可愛いよなあ。

「どしたはやて? 鳩がミサイルくらって絶命寸前みたいな顔して」

「いやそれ即死やんなっ! ? じゃなくて、裁きつてただのデコピンっ! ?」

「当たり前だろおが。女相手に本気で殴るとでも思っただのかよ」

「……でも私、盗聴しとってんで?」

「俺もお前に心配かけたから、これでおあいこ。それに、お前が心配してくれたって聞いた時、正直嬉しかったんだ」

何か照れくさいけど、やっぱりちゃんと言わないとな。

「ありがとう、はやて」

「っ／／／／」

俺が笑ってそう言つと、はやての顔がいきなり赤くなった。

「どうした？熱でもあんのか？」

俺は身を乗り出して、はやてのことと自分のでこをくつつけた。

「~~~~っ／／／／」

うゝん。熱はないな。

じゃあ風邪？

ん？つてうおいっ！！余計に赤くなってんじゃねえかつ！！

「はやて、本当に大丈夫かつ！？」

「だっ、だっ、大丈夫やからっ！！何でもあらへんっ！！アイムオツケーツ！！」

「何で英語？いやそれより……」

「ええいつ！！怪我人は大人しく寝とけえっ！！」

はやてが俺にタックルをかましてきやがった。

何しやがるファックツ！！殺す氣かつっ！！！？？

俺は体を痙攣させながらも、何とか意識をつなぎ止めた。

あ、危なかった……

危うくもう一度夢の中に旅立つところだったぜい。

てか、何でこうなったんだ？俺ってはやてを心配しただけだったよな？

うーん、謎だ。

「ありがとう、はやて」

そう言って、銀ちゃんが私に笑いかけた。

その顔は、いつもみたいないなバカやってる時の顔じゃなくて、すごく綺麗で、格好よかった。

「っ／＼／＼」

あ、あれ？

な、何で顔が赤なるんやろ？

お、おかしいなあ。

「どうした？熱でもあんのか？」

そう言つて、銀ちゃんが私のでこと自分のでこをくつつけた。

「~~~~~っ／／／／」

かつ、顔が近いっ！！

あつ、アカンツ！！今銀ちゃんの顔を直視するわけにはいかんっ！！
そう思つても、どうしても見てしまふ。

澄んだ瞳は綺麗で、髪は一つ一つが細くて艶がでてる。女顔やけど、
整った顔立ちは、とても格好よくて……って、私は何考えとんねん
っ！！

「はやて、本当に大丈夫かつ！？」

身を乗り出して聞いてくる。アカンツ！！

今はとにかくアカンツ！！

「だつ、だつ、大丈夫やからっ！！何でもあらへんっ！！アイムオ
ツケーツ！！」

って、何で私英語で話したんっ！？

「何で英語？いやそれより……」

うう……言わんとつて。

ああ、もうっ！

「ええいつ！！怪我人は大人しく寝とけっつ！！」

私は銀ちゃんにタツクルを食らわせ、無理矢理寝かせる。

あつ、やば……白目むいて泡吹いて痙攣しとる……

でも意識はあるみたいやな……

うう……ごめん銀ちゃんっ！！

激痛が何とか収まり、さっきあったことをようやく思い出した。取り敢えず、回想してみよう。

ボロボロの体を引きずりながら、アリナちゃんを医療関連の人達に渡そうと必死に前を歩いていた。

視界もぼやけ、何が起ったかもあまり分からなかったけど、一つだけわかったことがあった。

俺は、『死ぬ気の炎』を使っただったって。

あの状況でアリナちゃんを助けれたのは、それ以外に可能性がないからな。

あゝ、にしてもこういうボロボロの時ほど頭がよく回るっていうの本当だったんだな。

……………ん？

今フェイトの声が聞こえたような……………

「……………フェイトか？」

その後、フェイトと合流して、何とか脱出した。

んで、アリナちゃんのお母さんからお礼（もちろん金ではなく感謝の気持ち）とぬいぐるみを受け取り、そこで俺は倒れたんだ。

多分、『死ぬ気の零地点突破初代エディション』^{ファースト}を使っただと思う。

人間追い詰められると、何するかわかったもんじゃないね。

まあそんなことをしたせいだろうねえ。

俺の指と手首に、『虹のボンゴリング』と『プレスレット』がなくなっているのは……

いやゝ。まづったねえ。

てなわけで、神様助けて。

しかしそんなことで神様が出てくるわけなかった。

いや正確には絶対今の俺の状況を楽しみながら見てると思う。

まあそんなわけで、俺の寝てる布団の周りには、六課を代表する前衛の皆さんが集まっていたとき。

お家に帰りたい。

「じゃあまず聞くけど、このリングは何？」

「おしやれ」

チンッ（レヴァンティンを抜く音）

「超すみません」（土下座）

あちこち体が痛むが気にしない。蔑みの目を向けられるが気にしな

い。

……な、泣いてなんかないんだからねっ!!

「取り敢えず、洗い浚い話してもらうでえ」

「俺、お手柄。だから見逃して？」

ブンツ（グラーファイゼンをスイングする音）

「話します話します。全て洗い浚い話します」

くっそ。斬月がないから、どこまで話していいかわかんねえぞ？

「……取り敢えずそのリング貸して」

「……信用してええか？」

「あのな。この面子相手に何かしようとする程、俺は馬鹿じゃねえぞ？」

その言葉に納得し、はやてがリングを渡してくれる。

……まだ若干顔が赤いのは気のせいかな？

「えーっと……どこから話すかな……」

うん。転生の部分は省くとして……ならやっぱ死ぬ気の炎からか。

「人間には、目に見えない力、波動つてのが流れてるってのは知っ

てる？」

「魔力とはまた別なん？」

「あーうん、多分。魔力つてのははやての話だと、リンカーコアってのから排出されるエネルギーだろ？それとはまた別だよ」

俺はリングを指につける。出せるかな？

「で、その波動つてのは、七種類あるって言われて、このリングは、それをエネルギーとして排出するためのものなんだ」

あの時の感覚を思いだせ……覚悟を……炎につ！！

すると、リングからオレンジの炎が灯った。

よ、よかった。

全員はその光景に驚いていた。

「この炎のことを、死ぬ気の炎と呼ぶ。死ぬ気の炎は、それぞれの波動と同じように七種類あって、これはその一つ」

「全部見せれる？」

「うーん。俺も知識だけで、実際に意識して灯せたのは初めてだからなあ」

「え？そうなん？」

「ああ。この世界来る前に、変な奴からもらった奴でな……」

取り敢えず神様のことはこれで誤魔化そう。

「じゃあその人が銀ちゃんがこの世界に来ることになった原因？」

「多分そうなんじゃない？」

はいおもつくそそいつのせいです。次会う機会があったら千回殴る。

「まあ……取り敢えずやってみるか」

まずは、晴。

ピカアアア

おお、灯せたっ！

「これが晴の炎。特性は活性」

「特性？」

「それぞれの炎には、一つずつ特性があるんだ」

「へえ」

「これ、本当に炎なのか？」

「でも綺麗……」

「次行くぞ」

これって結構集中力いるな。

「雷……特性は硬化」

「うわっ、電気っ!？」

「これもう炎じゃねえだろっ!！」

無視。次だ次。

「霧……特性は構築」

「構築？」

「要は幻覚を作るってことだ」

「成る程」

「これも炎かどうか疑わしいな」

「そうですね……何かホワホワしてて今にも消えそう」

「まさに霧って感じだな」

次はえーっと……これでいいや。

「雲……特性は増殖」

「おわっ！いきなり炎っぽくなったっ！！」

「紫の炎なんて、初めて見たぞ……」

えっと、残りは……

「雨……特性は鎮静」

「これは炎って言うより、水に近い感じかな？」

「うん、そうだね」

次は一番炎の概念に近い炎のはず。

「嵐……特性は分解」

「真っ赤な炎？」

「何かまがまがしいな」

あ、俺もそれ思った。

「んでラストが天空……特性は調和」

「あ、始めの炎……」

「綺麗……」

「それに何だか……」

「うん、温かいね……」

あー、それは俺も思った。何か全てを包み込んでくれるような……

「これが大空の包容、か」

取り敢えず、この次はボックスか？

いやまだそっちはばれてないし、別にいつか。

「なら、あの氷は何なん？」

「死ぬ気の零地点突破初代エディション。まあ、奥義みたいなもん
だ」
ファースト

「まあ、そらあんなんできるんやからなあ」

「あー、因みに今の俺が使えるとは限らないぞ？」

「何で？」

「ほら、フェイトと初めて会った時あるじゃん？」

「う、うん……」

「そんなときもさあ、がむしゃらでやったら出来たみたいな感じで、
火事るときもがむしゃらにやったら出来た」

「なんつーでたらめな……」

「因みに斬月も、このリングくれたためっさ怪しい奴にもらったぞ。後あのプレスレットも」

「……………それで全部か？」

……………「ごまかしきる自信がねえ。」

「えっと……………一応ある」

「どんなん？」

……………「どうやったら出せるんだ？」

「斬月っ！カムバックッ！カムバー……ッバックッ！！」

「やかましいぞ銀時」

……………「いつからいやがった。」

「最初からだ」

「だったらちつとは説明手伝えよっ！！」

本当は誤魔化すの手伝えよと叫びたいが、はやて達の手前なこと
は言えない。口が裂けても。

「まあいいや……………ボックス匣っでどうやって出すの？」

「念じる」

「……………それだけ？」

「それだけ」

「……………悩んでた俺がアホみたいだ」

取り敢えず念じる。

すると数々の匣が出てきた。それに一同は何だこれはという視線を俺に向けてくる。

「えっと……………これは匣って言って、死ぬ気の炎を注入することで、中の武器を使えるようになっていて、武器のことは匣兵器って呼ばれてる」

「へえ。中にはどんなんがあるん？」

「んー、普通の武器に炎を灯らせるタイプと、生物に炎を灯らせるアニマル匣の二種類があつてな」

「生物！？」

「生き物が入ってるんですかつ！？」

「まあ正確には違うけど、似たようなもんかな」

「今開かれる？」

「……………やってみよう」

……取り敢えず、俺が原作で一番好きな、ロールにするか。

俺は雲属性の炎を灯らせ、開口する。

「雲ハリネズミVerボンゴレ……」

す、すげえ……マジで出てきた。

ただどすぐに匣の中に戻った。

「えっ!？」

「なっ、何で!？」

一同は驚いていた。俺だって驚きだよっ!!せっかくロールを出せ
たつてのに……

「……もしかして、炎が弱かったのか？」

「どういうこと？」

「アニマルタイプの匣は、エネルギー源を死ぬ気の炎にっていて、
それがなくなると匣の中に戻るんだ」

「なら炎を強くすれば……」

「無理。今日のあの火事のとくにほとんど使っちゃったから。それ
に俺の覚悟で出せる炎も決まってくるからな」

「覚悟？」

「ああ。波動を死ぬ気の炎に変えるためには、覚悟が必要なんだ」

「えっと……いまいわからないんだけど」

「例えばさ。皆は実戦とかで戦う時は、どんな相手でもある程度の覚悟を持って挑んだりしない？その覚悟を、炎にするイメージでリングに集中すると、初めて死ぬ気の炎になる。覚悟が大きければ大きい程、炎の純度があがる」

「純度？」

「密度って言った方がいいかな。純度があがればあがるほど、炎の色は澄んだ色になり、純度の高い炎は、炎の密度が高いと思ってくれ」

「成る程……もう隠してることはない？」

「ないない」

めっさありますはい。

「じゃあ今日は取り敢えず解散やな。銀ちゃんの処遇については、まあ何とかするから安心してな」

はやての一言で全員が解散となった。

鬼教官どもが、明日からどう鍛えるか話し合っていたが、俺には聞こえない。

「あつ、フェイト。ちょい待って」

「え？何？」

危つく忘れる所だった。俺は先ほどはやてから受け取ったものをフェイトに渡した。

「これは？」

「今日のお礼。気に入らなかったら返品していいよ」

「中身は？」

「開けてみな」

おもいつきり格好つけたポーズで言ったが、スルーされた。悲しいとき。

「わぁ……ぬいぐるみ？」

「ああ……や、やっぱ他のもののほうがよかった？」

俺の少ない給料じゃ高いものは買えなかったんだよう。

くそっ！はやての奴もつと給料あげやがれっ！！

「うつん、すごく嬉しい。ありがとう銀時」

満面の笑みでフェイトが言った。

ああ、この笑顔見てたら、買ってよかったって思えるなあ。

「どういたしまして」

だから俺も笑って返した。

「っ／／／／」

すると、フェイトの顔が赤くなった。あれ？俺、からかってないよね？

「フェイト、熱でもあんのか？」

そう言っで、俺はフェイトのでこと自分のでこをくつつけた。

あれ？何かデジャヴ。

フェイトは顔を更に真っ赤にして離れた。

「おっ、おいっ！大丈夫かっ！？」

「へっ、平気だからっ！！じゃあおやすみっ！！」

そう言っで、フェイトは医務室を出ていった。

あるえ？もしかして嫌われた？

「斬月……俺、フェイトに嫌われたかも……あ、そういえばはやても似たような反応だったなあ。もしかして二人ともに嫌われたのかなあ」

「……………はあ。汝は鈍感なのだな」

「何か言った？」

「何でもない。それより、明日からの地獄の特訓に備えて、今は休んでおけ」

今の俺のメンタルに止めをさすなっ！！

まあそんなこんなで、暴露話はこれにて終了した。

てか、変な奴でよく納得したな皆っ！！俺はこの部隊が心配になってきたぞっ！！信頼されてるのか？信頼されてるからなのかっ！？

寝転がりながらそんなことを考えていると、気付けば寝ていた。

「どういたしまして」

銀時が、そう言って私に笑いかけてくれた。

いつもみたくないはずらっ子のするような笑顔じゃなくて、その笑顔は子供のように無邪気なのに、穏やかでとても大人びていて、全

てを包み込んでくれるような笑顔だった。

「っ／／／／」

あ、あれ？おかしいな？

何で顔が赤くなるんだろう？

「フエイト、熱でもあんのか？」

そう言つて、銀時が自分のでこを私のでこにくつつけた。

わっ、わっ、か、顔が近いよ～～～っ！！

こうして銀時の顔を改めて見ると……うう、ますます顔が赤くなってきた……

私は慌てて銀時から離れた。

「おっ、おいっ！大丈夫かつ！？」

「へっ、平気だからっ！！じゃあおやすみっ！！」

私は急いで医務室から出た。

うう……今の態度絶対おかしかったよね……

次会つときどうしよう……

「ああ。どうしよう……」

私は自室のベッドで横になって頭をかかえた。

あ……。銀ちゃんの顔ばっか思い浮かべてしまう……

てか、あれは天然なんか？

今はこれからのことも考えなあかんの……

取り敢えず、あの銀ちゃんの力は、公に話すわけにはいかんよなあ

……

カリムとクロノくん相談してみよかな？

あの二人やったら親身に相談にのってくれるやろうしなあ。

あ、でもその前に、一つやっておきたいことあるし、それしてからにしようかな？

……そうしよ。その方がええやろし。

銀ちゃんは、まだ何か隠してるっぽいけど、多分これ以上話してくれんやろなあ。

何となくそう思った。

あゝ、やっぱり銀ちゃんのことばっか考えてる……

これはやっぱり“あれ”なんか？

うああああああああああああっ！！！！

あ、アカンツ！！

意識したら滅茶苦茶恥ずかしくなってきたっ！！

どっ、どうしよっ！！

明日銀ちゃんにどんな顔して会えばええんやーっ！！??

そんなことばかり考えていたけど、襲ってくる睡魔には勝てず、そのまま眠りについた。

その8 取り調べ（後書き）

銀時、いつもの。

銀時

「オッケー」

あれ？やけに聞き分けいいな？

銀時

「もう慣れたんだよ」

じゃあ、語尾にあれつけてやってみてよ。

銀時

「あれって……まさかっ！」

では今回は特別に、語尾にフリードリヒ・ヴェルヘルム・ニーチエをつけて発表してもらいましょう。

銀時

「ふっざけんなあああああああああああああああああああああああああ
ああああああああっ！！！」

語尾。

銀時

「フリードリヒ・ヴェルヘルム・ニーチエッ！！……はっ」

気付いたか？お前はもはや語尾と言われるだけで、自然とその言葉を叫んでしまうようになってしまったんだ。

銀時

「そ、そんな馬鹿な……」

語尾。

銀時

「フリードリヒ・ヴェルヘルム・ニーチェッ！！って本当だああああああああああああっっ！！！」

だがな、もし今回その喋り方に徹してくれたら、作者の権限を使ってお前をもとに戻してやろう。

銀時

「っ！？本当かっ！？フリードリヒ・ヴェルヘルム・ニーチェ」

ああ。本当さ。

銀時

「今日はやけに優しいじゃん。フリードリヒ・ヴェルヘルム・ニーチェ」

いやさ。やっとフラグ立てる所にいったと思うと気分が良くなってさあ。まあたまにはお前に優しくしてやろうと思ってな。

銀時

「（優しくしてくれるんなら、無条件で治してくれよ）」

その9 勝ち星(前書き)

銀時

「その10、テイクオフ!!」

セリフとられたっ!!

その9 勝ち星

「ふんっぬああああああああああっっ!!」

掛け声とともに、おもいつきり斬月を振る。

「ふんぬっ! せいやつ! そりやつ! そりやつ!」

何度も振る。

「そりやつせいやつうりやつていやっどりやつたあっとうっだあっ
はあっあたあっほとうっほわちやあっだらあっおらあっうらあっぐ
らあっふんぬらばっあちよおっほちよおっかちよおっさりやあっこ
りやあつまそっぷつやりやあうおりいやっはらあっかりやあっばけ
えっちびいっくそがあっていりやあっどらあっあらあっさらあっく
るわあっもりああっくまあっふあっくっ……………」

振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る
振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る
振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る
振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る
振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る
振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る
振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る
振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る振る
振る振る。

ああ、口調は乱暴だけど優しいんだなあ。

俺は落ち込んでる理由を正直に話した。端から見たらこれって小学生に相談する大人って構図になんねえ？

「お前……馬鹿だろ？」

ガン（　　；）

そ、そりやないっすよヴィータさん……

「まあ安心しろよ。二人とも、お前を嫌ってないのは確かだから」

「ほっ、本当かつ！？」

よ、よかった。俺よりずっと付き合いの長いヴィータの言葉だったら確実だろう。

「サンキュー、ヴィータ。何か心の中のモヤモヤが一個晴れたよ」

「そりゃよかったな」

ぶっきらばっくにそう言うヴィータ。あんた男前すぎだぜ。

まあこれ以上続けても無駄だし、取り敢えず朝食でも食べるにいくか。

「ふむ。どうするか……」

俺は悩んでいた。ものすっごい悩んでいた。

くそ。早く。早く選ばないと。

場所は食堂のフードコート。そして俺の目には、焼き魚定食とサン
ドイッチセツトの文字が。果たしてどちらを選べば……

早くしないと、このままじゃ後ろがつつかえてしまっつー！！

まだ後ろに人いないよね？

そう思い後ろを見ると、見慣れた顔がいた。

「はやてっ！？」

「えっ！？銀ちゃんっ！？」

どうやら向こうも俺のことに気付かなかったらしい。考え事でもしてたのか？

まあ、嫌われてないとわかったことだし、一緒に飯でも……

「あっ、そういえば部屋に忘れ物があったんやっつー！！ほな私それをとってくるわっ！！」

ダッシュで逃げられた。

…… ホントに嫌われてないよね？ ないよね？

「で、結局何にするんだい？」

食堂のおばちゃんが聞いてきた。

「ラーメンで」

こうなりややけ食いだ。

「さて。誰と食おうかなあ……」

たまには一人で食うのもいいかなあ……

ん？ おー、ちょうどいい食事相手がいんじゃないん。

「スバルー、ティアナー」

「え？ あー、銀さん。これから朝食？」

「ああ。一緒に食っていいか？」

「もちろん。大歓迎だよ。ね、ティア」

「そうね。別にいいわよ」

「そっぴゃ俺って、ティアとはまだあんま喋ったことねえな。」

「よしっ！これを機に仲良くなるぞっ！！」

「じゃあ、二人は訓練校からの友達なんだ」

朝食を食べながら、二人がどういう風に出会ったのかを聞いた。

「にしても、ティアナも大変だったんじゃないの？スバルのお守り
って」

「そうなのよ。この子いつも暴走しちゃってさー」

「あー、わかるわかる。んで、その尻拭いをティアナがやると。
お前も大変だったんだなあ」

「わかってくれる？」

「俺も似たようなことがあるからすっげえわかる」

「あんたも苦労してんのね……」

「まあなあ……」

「って、二人だけで盛り上がらないでよーっ!!」

スバルが自分の過去の恥ずかし話をされるのに耐えきれなくなりそう叫んできた。

てか、ティアナと友情を育むのに、時間は全く必要なかった。どうやら向こうも何かきっかけが欲しかったらしく、話すと滅茶苦茶気があい、気付けば昔からの友達みたいな感じで接していた。

「盛り上がってるんじゃないよ」

「盛り下がってるのよ」

こんなふうにもう息ぴったり。

まあそんな感じで、二人と楽しく談笑しながら、おいしくラーメンをいただきました。

「じゃあ、銀くんの訓練を発表するね」

……… ついに来たか。俺への死刑宣告が。

「午前の間は斬月での特訓で、午後からの訓練は、炎と匣兵器の訓練になったから」

今まで以上ハードとはわかっていたがそこまでっ!?

「取り敢えず、今日ははやてちゃんからの指示で、銀くんには模擬戦をもらうことになったから」

「はやてが?」

うゝん。

嫌われてはないらしいけど、何か避けられてるような気がすんだよな!……

「で、はやては?」

「ここやつ!」

ムギユツ

いきなり後ろから抱きつかれた。

つて!!

「何してんのはやてさんっ!?!」

てか胸あたってるからっ！！

「うじうじすんのなんか私らしくないから開き直すことにしてんっ！！」

「何の話だよっ！！てか、あたってるからっ！！」

俺の言葉でようやく気付いてくれたのか、顔を赤くしながら離れる。多分俺はもつと真っ赤だろうがなっ！！

てかいきなり何してんのっ！？ほら皆ポカーンってしてるからっ！！

「おほんっ。皆今の行動は気にせんとな」

いや気にするよっ！！

皆そう思ったんだろうけど、口には出さなかった。だって怖いもん。

あれ？何でフェイトさんはこちらを睨んでるのかな？怖いからやめてくれませんか？

「で、俺は誰とやるんだ？」

逃げました。真正面から向かい合う勇氣はありません。

「私だ」

シグナムが一步前にでてそう言う。

「ぐわあ あああああああ ああつっ！！昨日火傷した傷が痛む
ううううううううううううっ！！！！てな訳で、俺はこれにて」

ダッ
(俺が地面を蹴る音)

シュンツ（シグナムが一瞬で俺に追い付く音）

（ルパンダイブでシグナムの魔の手を避ける音）

ガシッ（虚しく俺が捕まる音）

ズルズル（連行される音）

[illegible]

俺の言葉は、虚しく空に響き渡るだけだった。

「使っているのはリングと匣だけって……最悪じゃん」

斬月、木刀、ブレスレットは使用禁止となった。どうやら今回は匣のことを知るのが目的らしい。

目の前にはレヴァンティンを構えるシグナム。

俺は、リングに雲の炎を灯す。

出した匣は、ボンゴレ匣ではなく、ノーマルの雲ハリネズミの入った匣。

まずはこれだっ！！

カチッ

バシユウ！！

匣から凄い勢いで雲ハリネズミがシグナムに向かった。

うそーんっ！！こんなに速いのっ！？

予想以上の速さの雲ハリネズミに、放った俺がびっくりする。

だがシグナムは、それを簡単に避け、一気に距離をつめてくる。

俺は急いで次の匣を開口した。

属性は嵐。つまり……

「SYSTEMA C・A・I」

一番扱いが難しいであろう匣を、あえて選んだ。

何故？

だって好きなんだもんっ！！

「フレイムアローツ！！」

嵐の炎の矢をシグナムに発射するが、それも避けられる。

だが甘いぜっ！！

「なっ……」

シグナムが驚いたようにその場からジャンプする。

ドガアアアンッ！！

シグナムがジャンプした瞬間、そこに雲ハリネズミが激突する。

ちいっ。惜しいっ！

遠隔操作で不意討ちを狙ったが、失敗に終わってしまった。

雲ハリネズミは炎がなくなり、匣の中に戻った。

やっぱ今の俺じゃあんま長く使えないか。

さて、C・A・Iの能力を確かめておくか……

えーっと確か……雨と嵐を混ぜて……

あれ？うまくいかない？

……………もしかして練習しないと使えない？

そついや昨日もロールをだした瞬間戻ったけど…………

あれって本当に炎が足りなかったからか？

もしかして…………

「ボンゴレ匣って…………今の俺じゃ使えない？」

いやもつと正確に言うなら…………

ボンゴレ匣は、まだ完成していないんじゃないのか？

ボンゴレ匣は、元となる匣があつた。

例えばノーマルの雲ハリネズミとか。

それを使いこなせるようになって、初めてボンゴレ匣は使えるんじゃないのか？

神様は言つてた。使いこなせるかどうかはあなた次第だと。なら、始めからボンゴレ匣を使える訳がないよなあ。

なら、俺の仮説はあたつていて、まずはそれを使いこなさないといけないのか？

さ、さ、最悪だあああああああつっ！！！！

C・A・I も使えないしっ!!

えっつと、えっつと……

そうだっ!! 時雨金時だっ!!

あれがあれば戦えるっ!!

でもどこにある?

あれは匣兵器じゃないんだ……ならどこに?

俺はベルトを見た。

……ま、まあものの試しにやってみるか。

俺は強く念じてみた。

すると、左手に時雨金時が現れた。

うそん。マジでだよ。

取り敢えず俺は出していたのを匣に戻し、次の匣を開いた。

「雨燕」

青い炎を纏った燕が出てきた。

よしっ!これなら戦えるっ!!

「準備はすんだか？」

今にも斬り掛かってくるような体勢のシグナムが、そう聞いてくる。

「わざわざ待ってくれたのか？」

「ああ」

「……後悔すんなよ」

「そうでなくては面白くない」

二人で剣を構える。

今の俺に匣の同時使用は無理。ならこれで決めるしかない。

俺は時雨金時に雨の炎を流し込んだ。

対するシグナムも、レヴァンティンに炎を纏わせる。

「行くぜ……」

俺はシグナムに一直線に突っ込んだ。

「時雨蒼燕流……攻式一の型」

雨燕を前にして突っ込む。

「車軸の雨」

そして、シグナムに向けて突きを最速の速度で放つ。

が、シグナムはそれをレヴァンティンで横に受け流した。

「紫電一閃っ!!」

そして炎を纏ったレヴァンティンを振り下ろしてきた。

ザバアッ

「っ!？」

しかしシグナムが斬ったのは、雨の炎でできた鏡に映る俺だ。

「時雨蒼燕流攻式九の型」

俺はシグナムの背後で、時雨金時を峰に構え、おもいつきり振り下ろした。

「うっし雨」

ガキインッ

しかしそれすらシグナムは刀で防いだ。化け物かつ!？

「今の一撃……中々よかったぞ」

「そりゃ……どうもっ!!」

俺は一旦距離をとることにした。

「っ！？」

そして、シグナムの顔が驚愕に歪んだ。

ほっ……半分賭けだったけど、うまくいったか。

「どうだ？体の調子は？」

「お前……これは何だ？体が……」

アタック・デイ・スクアール

「鮫衝撃。剣を振動させてぶつけることで、相手の神経を麻痺させる技だ」

「くっ、成る程な……だが、それだけではないのだろうか？」

「ご名答。雨の炎の特性は覚えてるか？」

「鎮静……か」

「そうだ。雨の炎を剣からお前に流し込み、動きを更に封じさせてもらった」

「だが、まだ勝負はついてないぞっ！！」

シグナムが一旦距離をとる。鮫衝撃の効果がなくなるまで時間をかせぐ気かっ！！んなことされたら勝ち目がねえっ！！ここで一気に決めるっ！！

俺は力一杯地面を蹴り、シグナムに近づく。

絞衝撃で動きの鈍っているシグナムに追い付くのは簡単だ。

これで決めるっ！！

下段から時雨金時を振るう。それを受け止めようとレヴァンティンを構えた。

だが、それこそがこちらの狙いだ。

俺は、時雨金時を手から一度離し、逆の手に持ちかえた。

「なっ……」

シグナムが驚きの声をあげた。

対応しようとするがもう遅いっ！！

「時雨蒼燕流攻式五の型……」

時雨金時を峰にして、振り抜くっ！！

「五月雨」

ドッ

時雨金時の峰がシグナムの腹にきまり、勝負はついた。

初めての俺の勝ち星だ。

「いやったあつ！！初めて勝ったあつ！！」

俺は両手をあげてはしゃぐ。

初めて勝ったつ！！

その事実が嬉しくて仕方ない。

ふっふっふっ。こりゃあボンゴレ匣も正解も、近いうちに使えるかもなあ。

「っと、そっぴやシグナム、大丈夫か？」

一応峰でやったとはいえ、おもいつきり振り抜いたからなあ。

「問題ない」

そう言ってるが、少しふらついている。

「しかし、リミッターがついてるとはいえ、お前に負けることになるとはな」

.....はい？

イマナンティッタ？

「そういえばお前には言っていなかったな。私達隊長陣は、魔力を抑えるリミッターをかせられているんだ」

うそおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおっっっ！！！！！！

じゃあ何？そのリミッターとやらがついていてその強さ？しかも隊長陣ってことはなのもフェイトもヴィータもってことか？

うそだあっっ！！！！

あ、さっき正解すぐ使えるとか言ってますいませんでした。

その後すぐに、俺たちははやて達と合流した。

「なあ銀ちゃん。私と一緒に来て欲しい場所があんねんけど……」

模擬戦のことをある程度皆と話し終えた後、はやてがそう言うてきた。

「来て欲しい場所？どこだ？」

「聖王教会」

その言葉に俺以外の奴が驚く。

え？何？そんなにやばい所なの？

「わかった」

取り敢えず頷いておいた。

はやてが連れて行く場所だから、大丈夫だろ。

まあそんな訳で、俺はこの時は知らなかったけど、とてつもなくえらい方との会談に行くことになったとさ。

でっ！！次に、俺のオリジナルボックスの能力とその名前も募集中だっ！！こっちは期限なしっ！！ンでラストがっ、この小説のメインヒロインを投票中だっ！！期限は機動六課の休日が始まるまでっ！！現在一位ははやでだっ！！このまま一位を独占かっ！？募集も投票も感想のリクエストの欄にいれてくれよなっ！！」

うん。毎回同じでつまらんか。おい銀時。これからは最後に一発芸やれ。

銀時

「無茶言うんじゃねえっ!!」

はあり、やれやれ。だからお前は銀時なんだ。

銀時

「何その銀魂で言う所のだからお前は新八なんだみたいな言い方。滅茶苦茶腹立つんだけど……」

でわまた次回。

銀時

[illegible]

その10 会談（前書き）

銀時

「その10、テイクオフッ!!」

感想待ってまゝす。

銀時

「邪魔すんなアアアアアアアアッ!!」

その10 会談

銀時 side

俺は、自分の部屋で聖王教会に行く準備をしていた。

髪をオールバックにし、サングラスをかけ、左目には傷ペタシール。白いスーツとズボンに赤いシャツ、そして右手に木刀、左手に葉巻を持っている。

さあて、準備もできたことだし。

「行くか」

「どこにやっつ！…！」

速攻ではやてに突っ込まれる。てか、ここ俺の部屋……

まあそんなわけで、俺はいつも通りの服装に戻され、聖王教会に行くことになった。

「なあ、これから会うカリムって人、どんな人なんだ？」

俺はフェイトから借りた車（壊したり傷をつけないように厳重注意をつけた）を運転しながら、助手席に座るはやてに聞いた。

てか、何で１６歳（本当は１９歳だけど）の俺が車の運転許されるの？ミッドと地球の法律は別なのか？

車の機能とか運転の仕方は同じみただけど……

そんなことを思いながら、事故らないように気をつけ（俺ってペーパードライバーだから）、はやてからカリムって人がどんな人か聞いた。その後、聖王教会についても聞き、俺の緊張は一気に膨れ上がってしまった。

運転だけはミスらないよう気をつけた。

「こ、ここか……」

現在、カリムさんの執務室前にいる。

あ、言い忘れてたけど、今の俺の肩には、雨燕こと小次郎が乗って

いる。

理由としては、なのはから少しでも長く匣兵器を使うために、普段から微量の炎を使うよう指示されたからだ。

つまり、最低限行動できるレベルの炎を小次郎に与え、持続時間を長くするという特訓だ。

その昔、なのはも似たような特訓をし、今回はその応用らしい。

うーん。最低限とはいえ、出し続けるのは結構疲れるなあ……

炎が無くなりそうになるたびに炎を供給してるから、本当に疲れる。

「そんなに緊張せんでもええよ。カリムとは仲がええから、もっとフランクリーに接しても問題ないでえ」

そ、そうなのか。

だったらいつもどおりにするか。

「カリム、入るでー」

そう言うてはやてが扉を開けた。

「いらっしやいはやて」

中に入ると、金髪のロングヘアのおしとやかという言葉が似合う美人が、笑顔で迎えてくれた。

部屋の中には、他にも黒髪の男の人がいた。この人も何かただ者じゃないって感じたな。

「そちらの方が、例の？」

カリムさんが、俺のほうを見てそう言う。

「そやで。銀ちゃん、挨拶」

「イエスマイロードッ！シルバータイムこと坂田銀時ですっ！！あだ名は銀さん銀ちゃん銀くんと様々ってことでジャストドウィット夜露死苦うっ！！！」

「アホかアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！」

はやてから手痛い突っ込みをうける。

やったっ！初めて突っ込んでもらえたっ！！！！（自己紹介のボケのこと）

「いやフランクリーな感じで接してみたんだけど……」

「限度があるやる限度がっ！！」

「そんな言葉俺の辞書にはねえっ！！」

「威張るなっ！！」

そんなこんなで、結局いつものやり取りみたいになってしまった。

その後、落ち着いた俺とはやては、カリムさんと黒髪の男の人の座るテーブルの向かい側に座った。

「えっと、改めまして、坂田銀時です」

取り敢えず、まともな自己紹介をしておく。

「初めまして。カリム・グラシアです。そしてこちらが……」

「クロノ・ハラオウンだ。よろしくな」

ん？ハラオウン？どっかで聞いたような……

「クロノくんはフェイトちゃんのお兄さんなんよ」

「マジでっ！？」

俺はクロノさんの顔をまじまじと見る。

あんま似てないなあ……

「フェイトとは、義兄妹なんだ」

「っ！？」

やっべっ、訳ありかつ！？

「ふーん……あっ、この紅茶何ていうんですか？」

取り敢えず無理矢理話をそらした。

「無理に話をそらさなくてもいいぞ？」

少し呆れた感じにクロノさんがそう言う。

「いやだつて……」

「君は優しいんだな」

「……………」

以前、同じことを言われたことがあった。

中学一年の冬。学校から下校していると、死にかけの猫を拾い、びしょ濡れになりながら動物病院に連れて行った時だ。

あの時、初めてあいつにあってんだよね……かけがえのない親友に……

まあその次の日に40度の熱が出たというオチつきだが。冬にびしょ濡れはやばいね、いやホント。

まあその話は置いて。いて。

その時と今では状況が全く違う。

さて、どうしよう……

「気にする必要はないよ。昔にいろいろあったけど、今では本当の

家族になっただけだから」

「……………」

ああ、この人はフェイトのことを本当に大事に思ってたなあ……

優しいなんてよく言うよ。あんたの方がよっぽど優しいだろ。

にしても俺って馬鹿だなあ。無駄なことに気をつかつちまった。

「そうですか。あつ、この紅茶って結局何なんですか？」

「まだそれを言うのか？」

今度は本当に呆れたように言われた。

ま、まあ雑談はこの辺にして。

「はやて。今日俺をここに連れて来たのは、俺のこれからとか、力とかについてか？」

「せや。取り敢えず、死ぬ気の炎の説明を、二人にして」

俺はリングに炎を灯し、驚いた表情の二人に説明した。

「凄いな……その肩に乗っているのは、匣兵器なのか？」

「はい。匣兵器の持続時間を長くするための特訓です」

「本当にこんな力があるのね……」

「で、二人に聞きたいねんけど、どうすればええと思う?。」

二人は少し黙った後、口を開いた。

「まあ、公に公開するべきではないだろうな」

「そうですね。地上本部、特にレジアス中将にこの事が知られたら……」

「レジアス中将?。」

「地上本部の、実質的トップで、この手の稀少技能レアスキルとかを嫌われはるんよ」

「うげっ」

実力者の上それって……相性最悪じゃん。

「じゃあ、この力は今後一切使わないほうがいいんですか?。」

「いいえ。それは違います」

「?。」

「聞いたところ、その力は一つ一つの能力が優れている上に多様だ。使いこなせるようになっておいて、損はないだろう」

「いざって時に使えるようにしといた方がいい、と?。」

「そういうことだ」

ふむ、成る程。先日の火事だって、俺が始めから初代エディションファーストを使えたら、もっと早くアリナちゃんを助けることができた……

この力を早く使いこなせるようにならないとっ!!

「一応言っておくが、焦る必要はないぞ」

何でばれたっ!?

「顔に出てますよ」

嘘おっ!!

「銀ちゃん、わかりやすすぎやで。どうせ火事の時のこと考えてたんやろ?」

何故そこまでわかるんだっ!?

「「あなた君が分かりやすいから」「」」

「てか、あなたたち普通に地の文に答えますね」

まあ、その後焦らずゆっくり強くなればいいと三人に説得された。この三人を見てると、俺もまだまだガキなんだと思い知らされるぜ。

最後に少し雑談し、これからの対策を話した後、解散となった。

「あっ、はやて。ちょっといいかしら?」

部屋を出ようとした所で、カリムさんがはやてを呼び止めた。

「何？カリム？」

はやてがそう聞くと、カリムさんがこっちを見てきた。

あつ、俺の前では話せないこととか？

「じゃあ、俺は外で待つてるよ」

「それなら、その間僕が話し相手になろう」

「あつ、ありがとうございます」

「別にそんなにかしこまらなくていいよ。それと、別に敬語で話さなくてもいいぞ？」

「えっ？でも……」

「はやて達にもため口なんだろう？なら構わないよ」

「あ、だったら私もそれでいいですよ」

「カリムさんまでっ！？」

てか、この人達って英雄みたいなもんだろっ！？ホントにいいのっ！？

「別にかわわないが（かまいませんが）？」

あ、ホントにいいんだ。

そんなわけで、俺に新しい友達が二人できました。

「で、この雨の炎の特性が鎮静で、相手の体に流し込んだりしたら動きを封じたりできる」

「成る程。じゃあさっきの晴は逆か？確か特性は活性だったはずだが……」

「そう。流石提督。すぐにわかるなんてなあ……この晴の炎は……」

現在、カリムの話が終わるのを、クロノに炎について詳しく教えることで時間を潰している。逆にクロノから自分の力を教えて貰ったりしている。これがまた結構楽しいんだな。

「二人とも、話終わったで」

はやてが俺達の所に来た。

「んじゃあもう行くよ」

「ああ。また暇な時にでも会おう」

「俺は特訓でそれどころじゃないだろうけどなあ」

「はははっ。まあ頑張れ。それじゃあ」

「ああ。またな」

「あ、そうや銀ちゃん。ちょい寄って欲しい場所あんなけど……」

車を運転していると、はやてがいきなりそんなことを言ってきた。

「別にいいぞ。で、行き先は？」

「x x に行つて」

「? りょーかい」

取り敢えず、その場所に行くことにした。

はやてに寄って欲しいと言われた場所は、病院だった。庭では、子供達がボールで遊んだりしている。

「知り合いでもいんのか？」

「私やのうて、銀ちゃんのな」

「???」

俺の知り合い？

一体どういう……

「ああっ!!」

ビクウツ

いきなりの大声に驚く。

声のした方を向く。

「っ!？」

俺は開いた口が塞がらなかった。横ではニヤニヤしているはやて。

大声をだした張本人は、ボールで遊ぶのを一旦中断し、他の友達と一言二言話した後、俺のほうに向かって走ってきた。

「先日は、どうもありがとうございましたっ!!」

そして、俺に頭をさげる。

その人物は、俺が火事で助けた、アリナちゃんその人だった。

「へえ。じゃあ、後数日したら退院なんだな」

俺は、アリナちゃんから体の具合について聞いていた。因みにはやては気を遣ってか、少し離れた場所にいる。

どうやら運良く大したことはなく、数日で退院できるらしい。

「はいっ！全部銀時さんのおかげですっ！」

満面の笑みでそう言ってくれるアリナちゃん。

この笑顔見ると、助けてよかったって本当に思う。

俺はその後、アリナちゃんと話しを続けた。

銀時 side out

はやて side

私はアリナちゃんと楽しそうに話してる銀ちゃんを見ながら、さっきの話を思い出していた……

*

「実は、先日新しい予言が出たの」

「っ!？」

新しい予言っ!？

「……取り敢えず、読んでみて」

まずは内容や。私に話すつてことは、無関係なわけやないやろ。

「わかったわ。『次元を越えし黒き刃と翼、神より授かりし神器を扱いし者。これらがぶつかり、姫消える時、全次元の運命が決まりし時。鍵握るは黒き者。其の魂砕け散りし時、全てが終わる』」

「……正直、信じられん内容やな」

いくら何でも、全次元の運命が決まるなんて……

それに……

タイミングで言ったら、この予言には銀ちゃんが関わってるってことになる。

『次元を越えし』……このワードは、次元漂流者の銀ちゃんにはぴたり当てはまる。それに死ぬ気の炎っていう不思議な力もある。

カリムが銀ちゃんに席を外して貰ったのは、そういうことなんやろう。

「私だって信じられないわ。でも、このタイミングで、銀時さんという存在が現れたことから、油断はできないわ」

確かにその通りや……

それに、銀ちゃんは何かを私らに隠してる。

「……………せやな。取り敢えず、対策はとつといたほうがええな」

「ええ……今日の話はここまでにしましょう。あなたの愛しの銀時さんも待つてることだし」

「せや……はいっ／＼／＼！？」

な、なっ、何言つとんのやカリムはっ！？

「ふふ。頑張つてね、はやて」

「え？なっ、ナンノコトカイマイチ……」

「気付いてないと思った？」

「……………っ／＼／＼。ほ、ほななカリムッ！！」

私は急いでその場を後にした。

その後、顔の火照りが収まるまで、教会内を散歩してたんは内緒や。

＊

次元の運命を決める者……

今、アリナちゃんと楽しそうに話している銀ちゃんを見てると、そんな存在には思えない。いや、思いたくない。

そんな大きな運命を、銀ちゃんには……背負って欲しくなんてないから……

「おーいはやてー。お前もこっちに来いよー」

そんな私の気も知らんと、そんなことを言ってくる銀ちゃん。

………はあ。ホンマ、悩むんが馬鹿らしくなってくるような笑顔に向けてくるなあ。

私はそう思った後、銀ちゃんらの話に混ぜてもらった。

カリムの予言が、外れてることを祈りながら。

はやてsideout

銀時side

「……………何これ？」

帰ってきた途端、なのはが一枚の紙を渡してきた。だが、俺はその内容から目をそらしたかった。

「銀くんの特訓表」

～～内容～～

起床六時。

六時半～七時半。

シグナムとの剣の打ち合い。

七時半～八時。

朝食。

八時～十二時。

シグナムとの剣の打ち合い＋ヴィータとの防御特訓。

十二時～一時。

休憩と昼食。

一時～三時。

フォワードメンバーとのコンビネーションの訓練。

三時～八時。

匣兵器の特訓。

内容。

匣兵器の持続時間を延ばす特訓。

その10 会談（後書き）

はい、いつもの。

銀時

「この小説では、俺の木刀及びブレスレットの名前を募集中だっ！期限はファーストアラート終了までっ！次に、俺のオリジナルボックスの能力&名前を募集中っ！！こっちは期限なしっ！そしてラストに、この小説のメインヒロインが誰がいいか投票中だっ！！全部、感想のリクエストの欄に書いてくれよなっ！！」

はい一発芸。

銀時

「よっしゃ任せろってふざけんなあっ！！」

ちつ、ノリよく行こうぜそこは。

銀時

「うるせえっ！！てか、全然来ないけど大丈夫なのか？」

まあ、一応木刀とブレスレットの名前の候補はあるし、オリジナルボックスの方も必殺技的なものを考えてるから、一応ってレベルで大丈夫。

銀時

「不安だ。果てしなく不安だ」

でわまた次回。

銀時

「不安だアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ツッ！！！！」

その11 ファーストアラート ? (前書き)

銀時

「その11、テイクオフッ!!」

感想待ってまゝす。

その11 ファーストアラート？

銀時 side

俺がはやて達に拾われてから三週間、機動六課が起動してから二週間、死ぬ気の炎の特訓を始めてから、十日経った。

正直何度も死ぬかと思った。時々視界にあのム力つくクソ神が無表情に高笑いしてるのがちらついたような気がしてならないのは気のせいだ。

そんな俺は今、早朝訓練のシグナムとの打ち合いを終え（ほぼ一方的に俺がやられる構図）、フォワード陣と一緒になのはの前に集まった。

「じゃ、今日の早朝訓練ラスト一本。皆まだ頑張れる？」

「「「「はいっ！」「」「」」」

「無理っ！ー！」

「じゃあ、シュートイベーションをやるよ」

「無視かコラッ！ー！」

「銀時うつさいっ！ー！」

ティアナに怒られてしまった。

「私の攻撃を五分間被弾しないで回避しきるか、私にクリーンヒットをいければクリア。誰か一人でも被弾したら、最初からやり直しだからね」

「げっ」

マジかよ……

五分なんて、もう俺動けないぞ？

いや、それは全員が。

「このボロボロ状態で、なのはさんの攻撃を五分間、捌ききる自信ある？」

「あるわけねえだろっ！！」

「『同じく』『』」

「じゃあ、どうにかして一発入れよう。銀時、時雨金時で、スバルとツートップ。いける？」

「やるしかないだろ」

俺は時雨金時を右手にだした。今回は斬月なしと言われたので。

「じゃあ、全員絶対回避っ！二分以内に決めるわよっ！！」

「『『『おうつ（はいっ）！』『』『』」

迫りくるアクセルシューターを、それぞれ跳んでかわす。

スバルがウィングロードでなのは左から攻め込み、反対からはティアナが射撃でなのはを狙う。

「アクセルッ！」

しかしなのはは、それを両方同時にアクセルシューターを撃って迎撃にでる。

しかし、それは両方偽物だった。

「シルエット……やるねティアナ」

今度は後ろからウィングロードでなのはに攻め込むスバル。

ここだっ！

俺はウィングロードを足場にジャンプし、真正面からなのはに向かう。

「でりゃああああああああっ！！！！」

前と後ろからの同時攻撃だっ！

しかし、両手で二つのバリアを使い、防がれてしまった。

「ぐぎぎぎっ……」

何とか力押しでバリアを破ろうとする俺とスバル。

しかし、俺達の両端からアクセルシューターが向かってきたので、慌てて下がって避ける。

「ちっ」

追いかけてくるアクセルシューターを見て舌打ちした後、いくつかの匣を同時に開口する。

S I S T E M A C ・ A ・ I ・

まだ完璧ではないが、ある程度は使えるようになった。

「フレイムアローツ!!」

雨と嵐の複合された炎がアクセルシューターにあたり、アクセルシューターをかき消し、そのままなのはに向かう。

なのははそれを左に移動して避ける。

スバルの方はティアナが何とかしてくれたいらしい。

「きゅくうつ!」

上から不意打ちの形で、フリードがブラストレイを放つが、それも避けられる。

だけど、時間は稼げた。

俺は、エリオとキャロの方を見た。キャロの補助魔法の詠唱は、後

少しで終わるところだ。

しかし、なのはが後少しというところで気付いてしまった。

っ、不味いつ!!

エリオとキャロにアクセルシューターが向かう。

しかし、エリオとキャロにアクセルシューターが直撃する事はなかった。

「ふう……間に合った」

エリオとキャロの周りには、円形状のシールドが、4つ浮いている。

俺の、SYSTEMA C・A・Iのシールドで、二人を守ったのだ。

「銀時さんっ!」

「行けえっ! エリオッ!」

「はいつ! ストラダッ!」

「Explosion」

ストラダから魔力が放出され、それを推進力にエリオがなのはに突っ込む。

ドガアアアアアアアアアアアアンッ!!!!

やったかつ!?

てか、これで決らなかったらもう勝ち目ねえぞ?

エリオが落ち、煙が晴れた先には、無傷のなのは。

ちきしょオオオオオオオオオオオオオオオオ!

終わったアアアアアアアアアアアアアッ!!

俺がそう絶望していると、なのはが笑顔で俺達に話しかけてきた。

「Mission Completed」

「お見事。ミッションコンプリート」

「マジでっ!?!」

「本当ですかっ!?!」

「ほら。バリアを抜いて、ジャケットまで通つたよ」

なのはのバリアジャケットの肩の部分には、少しの汚れがあった。

つまり……

「やったああああああああっ!!!」

俺が大声をあげて喜ぶのと同時に、歓声をあげるフォワード陣。

その後すぐにティアナにうるさいと殴られた。

「あー。S I S T E M A C・A・I・もようやく形になってきたなあ」

俺はそう呟きながら、今使える匣兵器を頭の中に思い浮かべる。

雨燕とのコンビネーションによる時雨蒼燕流。S I S T E M A C・A・I・の、十六種類の匣を、実戦ではまだ難しいが、一応全部を使えるレベルにまでもってきた。

……………それだけだ。

だって十日だよっ！？このくらいまでしかできるわけないじゃんっ！！

斬月の方は、魔力を流しこんで切れ味をあげる技をマスターしたが、月牙天衝は未だ使える見込みすらない。

大丈夫か？俺？

……………あれ？気付けば皆隊舎に向かって歩いてらあ。

何か話でもしてたのかなあ？

「斬月、どんな話してたんだ？」

「……………はあ」

ため息つきやがったよこいつ。

俺は斬月にどんな話をしていたかを聞きながら、皆の後を追った。

「新デバイス？」

隊舎に戻る道すがら、スバルからさっきの話の内容を聞く。

「うん。どんなのか楽しみでしようがないよっ！」

満面の笑みでそう言うスバル。んー、俺には始めから斬月があったから、よくわかんないなあ。

まあ、楽しみにしてるのならいいだろ。他の三人、ティアナも、顔にはあまり出していないが期待してる感じだし。

スバルの目の輝き見てたら、何だか俺も楽しみになってきた。

三人にはどんなデバイスが与えられるんだろうなあ。

そう思っていると、黒い車がこちらに向かってきていた。

フェイトの車だな、あれは。

車は俺達の前で止まり、オープンカーみたいな感じになった。運転席にフェイト、助手席にははやてが乗っていた。

これからどこかに行くのかな？

「フェイトさん、八神部隊長」

「すごーいつ！これ、フェイト隊長の車だったんですかつ！？」

うんうん。始めは驚くよな、やっぱ。

「そうだよ。地上での移動手段なんだ」

「皆練習のほうはどないや？」

「キツいので即刻緩やかな特訓にして欲しい所存であります」

「なのはちゃん。銀ちゃんの特訓量三倍にしていいで」

「超すいませんでしたっ！！（ジャンピング土下座）」

「わかればええ」

「…………チビ狸」（ボソツ）

「なのはちゃん」

「ホントにすいやせんしたああああっつ！……！」

ちきしょう……………もはや圧倒的上下関係が、俺とはやての間に築かれてる。

何とかせねば……

「無理やでそんなん」

なっ、心を読んだだとっつ！！！？

「エリオ、キャロ、ごめんね。私は二人の隊長なのに、見てあげられなくて」

「あっ、いえそんな……」

「大丈夫です」

うんうん。この二人はえらい子だね……。自分の隊長に心配かけないよう……

あれ？ちよつと待てよ？

「五人ともいい感じで慣れてきてるよ。いつ出勤があっても大丈夫」

「少なくとも今出勤しろって言われたら俺は死ぬ」

「そおかあ。それは頼もしいなあ」

「無視か？無視ですか？」

ん？さつき何か重大な事実に気付きかけてたような……

駄目だ。思い出せねえ。

「二人はどこかにお出かけ？」

「うん。ちよつと六番ポートまで」

「教会本部で、カリムと会談や。夕方には戻るよ」

「カリムと？」

十日前に行つたばっかじゃん。何かあつたのかな？

「私は昼前には戻るから、お昼は皆で一緒に食べようか」

「……はいつ！」「……」

「フェイトと食べるの久しぶりだな。楽しみにしてるから、早く帰つてこいよ」

「ふふつ。うん、わかった」

「ほななあ」

車が出発した。

ん、にしてもホントに何かあつたのかな？ちょい心配だな……

まあ、政治的な面なら、俺みたいな馬鹿はお役ご免だな。

それでも心配はするがな。

二人を見送った後、俺達はシャワールームへと向かった。

銀時 side out

スバル side

「えっと、スバルさんのローラーブーツと、ティアさんの銃って、ご自分で組まれたんですよね？」

シャワーを浴びていると、キャロがいきなりそんなことを言ってきた。

「うん。そつだよ」

「訓練校でも前の部隊でも、支給品って杖しかなかったのよ」

「私は魔法がベルカ式だし、戦闘スタイルがあんなだし、ティアもカートリッジシステムを使いたいからって」

「で、そうすると、自分で作るしかないのよ。訓練校じゃ、オリジナルデバイス持ちなんていなかったから、目立っちゃってね」

あははー。何だか昔の自分の失態を思い出しちゃったー。あの時はティアに一杯迷惑かけちゃったなー……………今もかも。

「あつ、もしかしてそれで、スバルさんとティアさん、お友達になつたんですか？」

「そうだよ」

「腐れ縁とあたしの苦悩の日々の始まりって言うて」

「えへへー」

言い返せないや。

でもティア、口元綻ばせて言っても説得力ないよ？

ティアのその笑みを見ると、何だか嬉しくなってきた。

「さてキャロ。頭洗おつか」

「はい。お願いします」

ああ。可愛いなあ。私に妹がいたら、こんな感じかなあ？

キャラの笑顔を見て、そんなことを思う。

私には姉はいても、妹はいないからなあ。ああ、決して姉のことが嫌いなわけじゃないよ？寧ろギン姉のことは大好きだしねっ！！

「エリオくんも今ごろ、銀時さんに洗ってもらってるのかなあ」

「そうなんじゃない？何だかんだで、あいつ優しいし」

おや？ティアが銀さん褒めるなんて珍しいなあ。

はっ、もしかして……

ゴツンッ

「痛い……」

「あんたが馬鹿な勘違いするからでしょ」

「うう……ごめんなさい」

でも銀さんカッコいいと思うけどなあ……

「エリオくんと一緒に入りたかったなあ」

「あ、じゃあ今度誘ってみる？ねえ、ティア」

「いいんじゃない？私も別に気にしないし」

「本当ですかっ!？」

「うん、本当だよ」

「じゃあ今度、五人と一緒に来ましょうねっ」

「…………五人？」

「はいっ。銀時さんもいれて五人ですっ！」

「それは駄目えっ!!!」

顔を真っ赤にしながら、ティアと私が力の限り叫んだ。

「駄目なんですか？」

キャロ……………銀さんは年齢的にアウトだよ。

その後、その旨を伝えるのに、十分ほどかった。

まだこれくらいの子に理解してもらうのは難しいなあ。

そう思った後、再びキャロの頭を洗ってあげた。

スバルsideout

銀時side

今、俺とエリオは、女性陣を待ちながら、ロビーでゲームをやっていた。

「ゆけっ、メタグロスッ!」

「行けえっ!ギヤラドスッ!」

「サイコキネシスッ!」

「ハイドロポンプッ!」

「シャドーボールッ!」

「もう一度ハイドロポンプッ!」

「メタグロスッ!くっ、ならばゆけっ、サーナイトッ!十万ボルトッ!」

「ああっ!ならこっちは……」

「あんたたち何やってんの？」

「ポケ　ン（です）」

「って、何でそんなもの持ってるのよっ!？」

「俺が買ったのを、エリオにあげたのだっ!あ、因みにエメラルドな」

「聞いてないしっ!後古いっ!」

「エリオくん。それ面白いの？」

「うん。やってみると結構はまるよ」

「へえ。やってみていい？」

「うん」

「キャロ。気に入ったら何時でも言ってくれ。すぐにお前のぶんも買ってきてやるから」

「あたしのは？」

「スバル、お前はガキじゃないんだから自分で買いに行け」

「えーっ!」

「こっちだって安月給で何とか買ったんだ。文句言うんじゃない」

「はい。あ、なら一緒に買いに行こうよ」

「まあそれならな。次の休みがいつか知らないけど」

「あー、確かに」

「ティアナは？」

「……………面白いの？」

「もちろん」

全てクリアしたらつまらんがな。

「そうね……………なら買ってみようかしら」

「よし。なら最新型のブラックとホワイトを……………」

「ちょっと待った。何で自分はエメラルドであたしは最新型？」

「いやあ。俺もホントはそっちのがよかったんだけど、金なくって

……………古市で唯一買ったのがエメラルドだったんだ」

「やっぱり買うのをやめるわ」

「ええええええええええええええええっ！！！！？」

そんなっ！それじゃ俺の『たまにでいいから貸してと言ってそのま
ま始めから最後まで徹夜でやってしまおう大作戦』が台無しじゃな

いかあつ！！！

「あんたの考えなんてお見通しよ」

ぐはっ！な、何故？

「顔に書いてある」

……………てか、心の中読まないでもらえませんか？

「無理」

「くうっ…………」

『OTL』の姿勢で落ち込む俺。

「でもまあ、エメラルドなら買おうかな……………」

「……………もしかして、仲間外れが嫌とか？」

ゴツンッ

鈍い音が、ロビーに響きましたとさ。

銀時
side
out

その11 ファーストアライト？（後書き）

えゝ。今回はちょっとした発表があります。

銀時

「どしたいきなり？」

まあいいから。取り敢えずお前はこの紙に書いてある内容を発表してくれ。

銀時

「？ああ。わかったよ」

銀時

「えっと……『募集していた木刀の名前ですが、作者が『これだっ！』というのを思いついたため、締め切らせていただきます。それと、プレスレットのほうですが、10月22日の、正午に締め切らせていただきます』……また急だなオイ」

気にするな。

銀時

「いや気にするっての……まあいいや。後はいつも通り？」

ああ。という訳で、後よろしく。

銀時

「はいはい……この小説では、俺のプレスレットの名前を絶賛募集中だっ！期限は10月22日の正午までだっ！次に俺のオリジナ

ルボックスの能力&名前を絶賛募集中だっ！こっちは期限なしっ！
そして最後に、この小説のメインヒロインを誰にするか大絶賛募集中だああっ！！期限は機動六課の休日が始まるまでだっ！現在一位は変わらずはやてっ！このまま一位を独占かつ！？これらは全部、感想のリクエストの欄に書いてくれよなっ！！」

この度はいきなりのこと、誠にすみませんでしたっ！！

銀時

「今回はまともだな……まあいいや。でわまた次回ー」

その12 ファーストアラート？（前書き）

その13、ファーストアラート？

銀時

「テイクオフッ!!」

感想待ってまゝす。

その12 ファーストアラート？

銀時 side

「これが……」

「あたし達の……新デバイス、ですか？」

只今俺達がいるのはデバイスメンテナンスルーム。

そこにはフォワード陣の新しいデバイスが4つ浮いていた。

……… どうやって浮かしてるんだ？

「そうでーす。設計主任私、協力、なのはさん、フェイトさん、レイジングハートさんとリイン曹長」

「……… なぁシャーリー。これってどうやってたら浮くんだ？」

「銀時くん。企業秘密って知ってる？」

あ、要するに教えてもらえないのね。

すっげえ気になるけど諦めるか。

目がスッゴク恐いつつーか据わってるし……

「ストラーダとケリユケイオンは変化なし、かな？」

「うん、そうなのかな？」

「確かに、全く変わってないよな」

「違いまーすっ！変化なしは外見だけですよー！」

エリキヤロ俺の言葉を、リンが否定する。

あー、そっぴやこいつも浮いてるよな。

じゃあこいつらが浮いてるのも納得……………できるか？

「二人はちゃんとしたデバイス経験がなかったですからー、感触に慣れてもらうために、基礎フレームと最低限の機能だけで渡してたです」

「え？」

「あれで最低限！？」

「本当に……………」

リンがさらっと信じらんないこと言いやがりましたよオイ。

てか、あれで最低限かあ…………

きつとすげえ強くなるんだろうなあ。

……………もう俺ってエリオ達の足手まといっことはないよね？ないよね？

「みんなが扱うことになる四機は、六課の前線メンバーと、メカニックススタッフが、技術と経験の粋を集めて作られた最新型っ！部隊の目的に合わせて、エリオにキャロ、スバルにティア、個性に合わせて作られた、文句なしの最高の機体です！この子たちはみんな、まだ生まれたばかりですが、いろんな人の想いや願いがこめられていて、一杯時間をかけてやっと完成したですっ！ただの道具や武器と思わないで大切に、だけど性能の限界までおもいつきり全開で使ってあげて欲しいですーっ！」

「……………斬月もか？」

「無論だ。私は汝の剣。汝を守り、共に戦うことが、私の望みだ」

「……………そっか」

そんな風に思ってくれてたんだな。なら、もっと頑張らないといけないな。

んで、いつか絶対、こいつを100%使いこなせるようになってやるっ！

……………まあ、今の俺は全然だけど。

「ごめんごめん。お待たせー」

「オーッス」

「なのはさんっ！」

「ナイスタイミングです。ちょうどこれから、機能説明をしようかと」

げっ。難しい話か？

俺の脳のキャパで話ついていけるかな？

いや、無理だ（反語）。

「威張るんじゃない」

「突っ込んでくれるとは思わなかったよ斬月」

「まず、その子達みんな、何段階かにわけて、出力リミッターをかけてるのね。一番最初の段階だと、そんなにビックリする程のパワーがでるわけじゃないから、まずは、それで扱いを覚えていって」

ホッ。すぐに差をつかされることはなさそうだ。

まあそうやって油断してると、すぐに抜かされるんだろうけど。

「で、各自が今の出力を扱いきれるようになったら、私やフェイト隊長、リンやシャーリーの判断で、解除していくから」

「ちょうど、一緒にレベルアップしてくような感じですね」

《………何っーか、話聞いてると、改めてお前が普通とは違っってわかったよ》

《ふん。今さらすぎるぞ銀時》

《ま、確かにそうだな》

「あ、出力リミッターっていうと、なのはさん達にもかかってますよね？」

「ぐはあっ」

テ、ティアナ……それは言わんといてえっ！！（何故か関西弁）十日前の自分が恥ずかしくなるからあっ！！

十日前、あのシグナムに勝って調子に乗っているいろいろ自画自賛したことは、今でも俺にとっては恥辱ものだ。

（実際はリミッターつきで一度とはいえ、あのシグナムに勝ったことは、六課の前衛メンバーや隊長陣にかなりの衝撃を与えていて、実はかなり期待されているのだが、銀時がその事に気付くことはなかった）

「ああ。私達は、デバイスだけじゃなくて、本人にもだけどね」

「……えっ？」「……」

なのはの言葉にフォワード四名が驚いている。まあ、そりゃそうだよなあ。

……俺がこいつらに追い付ける日って来るのかな？

……まあ、まだ魔法と知り合って三週間だしな。

追い付けなくて当たり前か。

むしろ、フォワード達と同じくらいの力持ってるほうがおかしいか。

「リミッターがですか？」

「能力限定って言ってね。ウチの隊長と副隊長はみんなだよ。私とフェイト隊長、シグナム副隊長とヴィータ副隊長」

「はやてちゃんもですね」

「えっ？」

はやてもなのか？そういや、はやてが戦っていると見たことないな。

まあ部隊長だし、強くて当たり前か。

……………あれ？何だろ？悲しくなってきた。

ってか、ここの女どもは強すぎだろっ！！

一体どんな肉体改造したらそうなるんだよっ！！

「部隊ごとに保有できる、魔導師ランクの総計規模って決まってるじゃない」

「は？初耳だぞそんなこと」

「銀くんは次元漂流者なんだから当たり前だよ」

「そりゃそうか」

何を当たり前のことを言ってたんだ俺は……

会話に交ざれなくて寂しかったのかオイ。

いくら何でも悲しすぎるぞ俺。

「一つの部隊でたくさんの優秀な魔導師を保有したい場合、そこにうまく収まるよう、魔力の出力リミッターをかけるですよ」

「へー……ん？」

「どうしたですか？」

「いや、俺って魔力だけなら結構あるじゃん？だからリミッターがなくていいのかなー、と」

「ああ。それなら大丈夫だよ。銀くんは民間協力者ってことになってるから、その規則には当てはまらないよ」

「成る程」

裏で狸がごり押しで通したような気がしてならないのは、気のせいだろう。

「まあ、裏技っちゃ裏技なんだけどね」

「うちの場合だと、はやて部隊長が4ランクダウンで、隊長達は大体2ランクダウンかなあ」

2ランク……シグナムは確かS-だから……AA-の奴に勝ったってことか。

俺は魔力だけならAAA+……まだまだ扱えてない証拠だな。

んで、一番意外なのがはやて。4ランクだあ？ありえねえだろそれ。

「4つ。八神部隊長ってSSランクのはずだから……」

「Aランクまで落としてるんですか？」

「はやてちゃんも色々苦労してるです」

「その分俺でストレス発散してる旨があるのは気のせいかな？」

「気のせいです」

笑顔で言い切りやがったっ！！

ま、まあ何だかんだで楽しいから別にいいんだけど……

「なのはさんは？」

「私は元々S+だったから、2、5ランクダウンでAA。だからもうすぐ、一人で皆の相手するのは辛くなってくるかなあ」

「つまり下剋上のチャンスがあるって？」

「その前に今おとしておこうか？」

「超すいませんでしたっ!!」(土下座)

ふっ。最近土下座が板に付いてきたぜ。

周りからは冷たい視線。

そろそろ本気で泣きそう。

「隊長さん達ははやてちゃんの、はやてちゃんは、直接の上司の力
リムさんか、部隊の監査役、クロノ提督の許可がないと、リミッタ
ー解除はできないですし……許可は、滅多なことではだせないそう
です」

「んなもん使わなくても、こいつら化けモンみたいに強いじゃねえ
……すいません。冗談です。だからその輝くような笑顔をしまつて
くださいなのは様っ!!」

「ふふふ。午後からの訓練が楽しみだね、銀くん」

「いイヤアアアアアアアアアアッ!!」

今日、もし寝るとき、人の形してたらいいな。

「まあ、隊長達の話は、心の片隅くらいでいいよ。今は皆のデバイ
スのこと」

「……はい」

「隊長。今は自分が生き残ることしか考えられません」

「大丈夫だよ。そんなことは無駄だから」

俺が死ぬのは確定事項っ!？

「新型も、皆の訓練データを基準に調整してるから、いきなり使っても、違和感はないと思うんだけどね」

「午後の訓練の時にでもテストして、微調整しようか」

「ガクガクぶるぶる」

し、死ぬ……

絶対このままじゃ死ぬ……

てか、俺は今日皆のデバイスがどんなのか楽しみできたはずだ。なのに何故死刑宣告をうけることにつ!？

「自業自得だと思うが？」

俺には何も聞こえなかった。

「人はそれを現実逃避という」

うるせえっ!!

「遠隔調整もできますから、手間はほとんどかからないと思いますよ」

「はあ。便利だよねえ、最近は」

……何か今のなのは言い方って、

「オバサンくさいな………はっ」

しまったアアアアアアアッ！！

何口走つとんじゃ俺はアアアアアアアアアアアアアアアアアッ
ッ！！！！

気付いた時には時既に遅し。

そこには、修羅がいた。

「銀くくくん？ちくくくつと“お話し”しようか？」

「イ、イエ。イマノハケツシテホンシンカラノコトバデハナク……」

「問答無用」

ズルズルと俺をどこかへと連れていくのは。

「ひっ、ひいっ！だ、誰か助け………」

助けを呼ぼうとしたところで、全員が俺に向けて合掌しているのに
気付いた。

「チキシヨオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！

ツンデレうるさい。

「ちょっ、誰がツンデレよっ!」

「反応してる時点でお前じゃあっ!」

もはややくそ気味にティアナに叫ぶ。てかやくそだ。

「……………銀時?」(ニコッ)

「すみませんでした」(土下座)

本日二度目の土下座。

てか、ティアナさん。笑顔がなのは隊長並に恐いです。

「てか、今もし出動しろって言われたら俺……………」

ブーツ ブーツ

……………何この音?

「このアラートって……………」

「一級警戒体勢!」

「グリフィス君っ!」

『はい。教会本部から、出動要請ですっ!』

「ウソオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オツツ!!!!？」

そんな訳で、俺の初任務が始まった。

銀時 side out

その12 ファーストアラート？（後書き）

パツパカパーン

ドンドンパフパフツ

キーキーキーコー

ズンズンチャツチャツ

ズンカッタタツ

ドドンツ

チャーーーーーン

銀時

「……………どうしたいきなり？」

いやぁ。今日からこの後書きの欄に、現在の投票結果が一位のキャラを、レギュラーとしてここに参加してもらおうと思ってさ。出来るだけ派手にしてみました

銀時

「派手すぎんだろっ！絶対無駄な行数稼ぎだっと思われるよっ！」

その通り（´、`）b

銀時

「威張んじゃねえよっ!!」

まあまあ。それより、早速呼びましょう!

銀時

「現在一位つてーと……」

パツパカパーン

はやて

「私やああああっ!!」

銀時

「……………」

はやて

「何でそこでノーリアクションっ!？」

銀時

「いやお前が出てきた時点で、俺がお前ら二人に弄ばれて終わる構図しか思い浮かばなかったから、つい」

はやて

「つい、やないわっ!こちら今回本編のほうで出番が全くなかったからこっちで取り返そうと思ったのに……いきなり出鼻くじかれたわっ!どないしてくれんねんっ!」

銀時

「知るかアツ!!大体、あの辺りはアニメ本編と変わりないから、作者が別に省いてもいっつか、って思ったのが原因なんだっ!文句な

ら作者に言いやがれっ!!」

はやて

「……ホンマか？」

はやてが作者にきれいな笑顔で聞いた。

しかし、そこに作者はおらず、変わりにこんな紙が。

『後任せた』

バリイ

銀時&はやて

「ふざけんなアアアアアアアアアアアアアアアアッ!
!!」

銀時

「何?何なのアイツッ!?まだ何もやってないじゃんっ!!映画の監督がクランクアップする前に帰るような暴挙だよコレッ!!」

はやて

「しかも、せっかくの私の初登場なのに、ろくなことせず帰りよつてえっ!!本編でもオマケでもこれはあんまりやあっ!!」

銀時

「くっそお……こうなりやはやて。次回あいつが来ても、もはや何も出来ないよう、このコーナーを俺達で乗っ取るぞっ!!」

はやて

「おつ、銀ちゃんナイスアイデアやつ！じゃあ早速………何しよ？」

銀時

「え？そりゃあ……質問コーナー？」

はやて

「誰からのやつ！？そんなコーナー存在せんやろっ！！」

銀時

「あー、じゃあ次回からしよう」

はやて

「今回やらな意味ないやろ」

銀時

「いやはやて。よく考えてみる。奴のいない間に、俺達でコーナーを作ってしまうば、奴の居場所をなくすことができる」

はやて

「成る程……じゃあ今回のうちにコーナーをできるだけ考えなあかんな」

銀時

「そうだ。まあ、まずは質問コーナーにしよう。これは、読者の皆が、俺達に質問してきたのに答えるコーナーになるな」

はやて

「質問は、感想のリクエストの欄の書いてなー」

銀時

「あつ、ついでだから、コーナーの募集もしてみるか」

はやて

「それええな　その方がええ案出そうやし」

銀時

「ならこれも決定だな。これも感想のリクエストの欄に書いてくれな」

はやて

「次はそやなあ……何かある？」

銀時

「………思い浮かばねえ」

はやて

「私も……」

銀時

「情けないぞ関西人っ！」

はやて

「誰が関西人やっ！私かつ！」

銀時

「ノリッコツミッ!？」

銀時

「や、やるな……」

はやて

「ふふん」

銀時

「でも今やることからはかけ離れてるよなあ」

はやて

「気にしたら負けや。うーん。でもホンマにどないしょ……」

銀時

「他作品からゲスト呼ぶとか？」

はやて

「来てくれるか？」

銀時

「そこはやってみないと……自信なくなってきた」

はやて

「ま、まあ一応やってみよ」

銀時

「そ、そうだな。じゃあ、この後書きのコーナーに出てくれるキャラを絶賛募集するっ！リリカルなのはの二次創作のオリキャラだったらベストッ！オリキャラじゃなくても、人語が喋れたらもうオツケーッ！！感想のリクエストの欄に書いてくれっ！！」

はやて

「ちょい待ちいっ！！その応募でホンマにええんかあっ！？」

銀時

「はやて……手段を選ぶ余裕は、俺達にはないんだ」

はやて

「うわごつつリアルな話や……まあ、人の形してるのが来るのを祈ろう」

銀時

「いやまず一人でも候補してくれるかどうかだと思っぞ？」

はやて

「……………前途多難やね」

銀時

「俺もそう思う。まあ、なるようになるだろ。多分」

はやて

「せやね じゃあ最後にいつもの、行ってみよかー」

銀時

「ラジャツ。この小説では、俺のブレスレットの名前を絶賛募集中っ！期限は10月22日の午後12時までっ！もう後少ししかないけど、未だに0なんだよなあ……………このまま終わりそう」

はやて

「ぎ、銀ちゃんっ！次や次っ！」

銀時

「っと、そうだなっ！次は、俺のオリジナルボックスの能力と名前を絶賛募集中っ！こっちの期限は今のところなしっ！こっちもまだ

「0だよなあ」

はやて

「でも作者も一応考えてんねやる？」

銀時

「まだ一個しか考えてないってさ」

はやて

「うわあ。適当……」

銀時

「今更すぎるな。じゃあラストツ！この小説のメインヒロインは誰がいいかを、絶賛投票中だあっ！！」

はやて

「現在の一位は私やでえ。みんな、私に投票してなあ」

銀時

「めっさ堂々とアピールしますねアンタ」

はやて

「そのためのコーナーでもあるんやろ？」

銀時

「いやそこまでは知らないけど……」

はやて

「ほな、今度は私から発表するでえ」

銀時

「へ？何を？」

はやて

「君の頭は大丈夫か？今回からいろいろ新しいのが増えたやろ？」

銀時

「ああ。そういえばクソ作者の居場所なくすためにそんなことやったなあ」

はやて

「まあこんな脳のキャパがミジンコ並の銀ちゃんはほっといて」

銀時

「（；）」

はやて

「この後書きのコーナーでは、私らに対する質問を募集してまーす。質問は、感想のリクエストの欄に……」

銀時

「なあ。今更思っただけど、一々感想のリクエストの欄に言うのおかしくない？」

はやて

「言われてみたらそうやね……じゃあ今から言っつのは全部感想のリクエストの欄に書いてな」

銀時

「んじゃ、続き」

はやて

「えっと、この後書きのコーナーで使うコーナーを募集してるでえ」

銀時

「何かややこしいな」

はやて

「つまり何でもいいからコーナー募集してんねん」

銀時

「うわっ。すげえ適当」

はやて

「ええやろ。読者の皆さんかてわかるやろっし」

銀時

「それもそうか」

はやて

「じゃあラスト。この後書きのコーナーに、他作品のキャラを募集してますっ！銀ちゃん曰く、リリカルなのはオリキャラじゃなくても、人語さえ話せたらええとのことですので、気楽に書いてくださいー」

銀時

「ふう、終わった……さて、この中で一体いくつが書かれるか……」

はやて

「それはわからんけど、今言えることは一つや」

「だな」

「打倒作者ア
アアアアアアアアアアアア
アアアアアアアツツ！！！！！」

祝PV五万記念！！バスケがしたいですって有名な言葉だけだからといっていや、当初予定してたよりもかなり長くなりそうなので、分けることにしました。

この番外編は、本編とは一切関係ありませんのでご了承ください。
それではどうぞ

祝PV五万記念！！バスケットがしたいですって有名な言葉だけだからといってー

「バスケットが、したいです……」

いきなりロビーに呼び出されたと思ったら、はやてがバスケットボール片手に跪いてそんなことを言ってきた。

……ああ、あれか。

きつと五月病だなうん。

「ンなわけあるかいっ！！」

鉄のハリセンにて手痛いツッコミを受ける。

今回は補正能力が働かなかったのか、頭からはドクドクと血が流れる。

し、死ぬ……

だが倒れることはない。

何故？

今回の物語が続かなくなるから。

「って、何でいきなり某ス ム Dank のセリフをかましてんだよっ
！？」

取り敢えず今更ながら突っ込んでおこう。流石に見逃せるレベルではないので。

てか、血が、血がつ!!

「ふっふっふ。よくぞ聞いてくれましたっ!」

出来れば聞きたくない。今日も戦闘^{シグナム}狂との打ち合いで既にボロボロなんだ……

早く部屋で休ませて……

「ほな、行こか」

「待ていつ!!」

「何が？」

「可愛らしく首を傾げながら、何が？じゃねえっ!!まだ理由何も聞いてないんですがっ!？」

「おー。そやったそやった。忘れとったわ」

嘘だ。あのほくそ笑んだ顔は狙ってやった顔だ。

「いやな？ちよつとある漫画を最近読んだんやけどな」

絶対スラムダンクだ。

「その漫画に感動してん!!」

「……………」

「ん？終わりやで？」

「えっ？あれで！？」

「うんそやで。ほな早速……………」

「行くかあっ！！結局まだ何も説明してねえじゃねえかてめえっ！！！」

「いややから、感動したから私もバスケがしたいと……………」

「動機浅っ！！！」

「銀ちゃん…………動機がどんなでも、それがきっかけで一つのことによって一生懸命になるんて…………素敵やん？」

「お前明日には野球がしたいですって言ってそうだけどな」

「ほな早速人集めに行くでっ！！！」

「やだよっ！！！」

「トーナメント制で優勝賞金十万」

「やったらあああああああああああああああああああああ
っっ！！！！！」

「つまり、もうなのは、フェイト、リンの三人には話していて、それぞれが組んだ四チームによるトーナメント制で、方式は3 on 3で制限時間は二十分と」

俺とはやては、歩きながら今大会のルールというか方式を聞いていた。

「せや。ま、後一人は私の人徳で何とかしてみせたる」

「人徳ねえ……」

ま、一応これでも部隊長だし、あてにはなるか。

「にしても、よくなのはとフェイトも参加する気になったな」

「みんな金には弱いわあ」

「……………」

今のは聞かなかったことにしよう。俺も人のことは言えないが……

「んで、誰を誘いに行くんだ？」

「そんなん決まってるやゝん」

「ああ。成る程」

背が高くて、運動神経の良さそうな…

「「シグナムや（か）」」

「はあああああつっ！？」

はやての奇声が響き渡る。

場所は訓練場。そこには俺、はやて、シグナムの三人。

で、何故はやてが奇声をあげたかというと……

まあ、皆のご想像通りシグナムに断られたからだ。

「なっ、何でやシグナム！？」

「すみません。既にテストロッサから誘われていて」

「ラグナロクウウウウウウウウウウウウッ……!!」

「あああああああああああああああああああああああああ
あああああああつ！？」」

ドガガア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアン！！

•

「し、死ぬ……」

まだ試合が始まるどころかチームすら揃っていない時点で身も心も既に満身創痍。

だ、だ、だが俺は諦めないぜえ。

十万…………ふっふっふう~~~~

「銀ちゃん壊れとるな」

誰のせいだ誰のっ!!

「で、次は？」

「スバルや。運動能力でシグナムと渡り会えとしたり、スバルしか考えられん」

「ふうむ……」

何だろう？物凄くオチが見えるのは気のせいだろうか？

「あ、それならもうなのはさんに誘われましたよ?」

フアアアアアアアアアアアアアアアアックッ!!

今のはやてにそれは禁句だスバルウウウウウウウウウウウウウウウウッ!!

「部隊長権限で、もしスバルがこっちに来るなら……」

「こらこらこらあっ!!何スバルに怪しげなこと吹き込もうとしてんだよっ!!てか、始めに言ってた人徳の二文字はどこ行ったあっ!!」

「人徳?ややなー銀ちゃん。世の中そんな甘ったれた言葉が通用するわけないやーん」

黒っ!!今のはやてめっさ黒いんですけどっ!?

何か後ろからもまがましいどす黒いオーラが……

「え、えーっと……」

あ、スバル戸惑ってる。

てか、今のうちに逃げといたほうが……

「どうしてもこっちに来るんわ無理なんやな？」

「は、はい……」

「ならここで戦力は潰しとくべきやなあ」

バツ（もの凄い勢いで俺が逃げる音）

「遠き地にて、闇に沈めー」

はつやてさああああああああんっ！！それ広域殲滅魔法
ウウウウウウウウウウウウウウウウウッ！！！！！！

「キャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ
！！！！」

スバルも自分のピンチに気付き、俺の方に向かって走ってくる。

「バツキャロオッ！！こっち来んじゃねエエエエエエエエ
エエエエエエエエエエッ！！！！」

「そんなこと言っただてエエエエエエエエエエエエエエ
ッ！！！！」

「デアボリッククウ……」

「ヒイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイッ！！！！」

「エミッシヨオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ンッ

「ヴィイタアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！
！！」

俺はもの凄い勢いでヴィータに近づき、肩を両手で掴む。

「うおっ！？な、何だ？」

「お前バスケット好きだよなあ？好きだったはずだ。てか好きになれや
こら」

「いきなりすぎてわけわかんないんだけど……」

「実はかくしかじかなわけで……」

「あー、成る程……」

途端にヴィータが俺を哀れみの目で見てくるが気にしない。悲しく
なるから……

「で？どうだっ！？」

「んー。まあ、別にいいぜ」

いよっしやあああああああああああああああ
っ！！！！！！

ヴィータなら運動能力に問題ないだろう！！これではやても大人し
く……

祝PV五万記念！！バスケがしたいですって有名な言葉だけだからといってー

どうしよう……

銀時

「どうしたいきなり？」

いや……予定ではお前ら優勝させるつもりなんだけど……なのよ悪魔に勝つ構図がどうしても思い浮かばない。

はやて

「あー、確かに……」

銀時

「はっ、それがどうした」

おっ、強気だねえ。

銀時

「ったりめえよ。こちらら金に魂を売った悪魔なんだからな」

はやて

「いやそれ自慢でも何でもないよね？」

まあそれはそうと君たち。前回は随分と勝手なことをしてくれたよ
うで？

銀時&はやて

「（ぎくっ）」

しかも結果は一通も来ないと来たもんだ。

銀時&はやて

「ぐはっ」

まあ、この超絶最強完全無欠たる私を出し抜くなぞ十年早いということだよ君。

はやて

「ぐわあああああ……腹立つっ！めつつちゃ腹立つっ！！」

銀時

「斬っていいか？いいよな？てか斬らせろっ！！」

まあまあ。落ち着きたまえよ。

全く……少しは私を見習って欲しいものだ。

はやて&銀時

「ずばらで適当な独身男性のどこを見習えと？」

あんだとコラアッ！？いてもうたろかわれえっ！！？

はやて

「うわー。ものすごーい簡単な挑発でキャラ壊しよったでこいつ」

銀時

「根本的に駄目なんだろ。人としても芸人としても」

ようしそこに一列に並べー。順番に撃ち殺してやつからー。

銀時

「どこのスナイパーだお前は」

はやて

「（銀ちゃん銀ちゃん。このままやと無駄に時間くうだけやから、取り敢えずおだてて先に進ませるで）」

銀時

「（あいよ）いやあ、さっきのは軽いジョークなんだけどなあ。まあ？紳士たる作者様がこの程度で怒ることなんてないだろうけど？」

はやて

「（いやいや銀ちゃんっ！いくら何でもそんな適当な言葉で……）」

あつたり前じゃん

はやて

「（アホやつ！！こいつ真性のアホやつっ！！！！）」

ふふん。ついに君たちにもこの私の魅力がわかったかね。

銀時

「ああ。もちろんさっ！（反面教師としてのな）」

はやて

「全くやでっ！！（あんたの扱いやすさをな）」

そんな君たちには、ちょっとしたボーナスを与えようと思う。

銀時

「ボーナス？」

そ、ボーナス。

はやて

「どんな？」

この番外編が終わるまで、この後書きの欄を君たちに丸投げ……ゲ
フンツゲフンツ。君たちの好きにしていーいよ。

はやて

「いや今丸投げって言おうとしたよなっ！？」

銀時

「ボーナスってあれかつ！？俺達がこのコーナーやってる間楽する
ための自分へのボーナスかコラッ！！！」

まあまあ。落ち着いて。

銀時&はやて

「落ち着けるかあっ！！！」

まあ話を最後まで聞けつて。前回、お前らが好き勝手やってこのコ
ーナー乗っ取ろうとしてたじゃん？

銀時

「あ、ああ……」

で、その計画はこうしてこれでもかってくらい見事に失敗したわけじゃん。

銀時&はやて

「ぐはっ」

だから、その準備期間を与えようというわけさ。

銀時

「っ、つまりお前が次来るときまでに、俺達がこのコーナーを乗っ取ればいい、と？」

そゆこと。

はやて

「でも何でそんなんするん？」

ん？このままやっても退屈っつか、お前らとばっかトークするだけってのに飽きてきたから。

銀時&はやて

「結局自分のためかよっ！……」

はっはっはー。ではこれにて失礼する。さらばっ！！

銀時

「あっ、やろーいねえっ……」

はやて

「くううつ」。逃げられたかあ」

銀時

「くつ、こうなりや意地でも成功させてやる……」

はやて

「どうやって？」

銀時

「……………えー、この小説では」

はやて

「さじ投げたっ!？」

銀時

「うるさいっ!もうなるようになれたっ!この小説では、俺のオリジナルボックスの能力と名前を絶賛募集中!!!んで、次にこの後書きの欄のコーナーを募集中っ!!!そして、今のところ唯一決まっている質問コーナーも絶賛受付中っ!!!俺達のことについて、答えられる範囲で答えるからっ!!!そして、このコーナーのゲストも募集中っ!!!人語さえ話せたらもうオツケーだから気軽に来てくれっ!!!んでラスト、この小説のメインヒロインを投票中だ!現在一位ははやてっ!このまま独走かっ!?!今言っただのは全部感想のリクエストの欄に書いてくれよなっ!!!ぜえ……………ぜえ……………」

はやて

「おお……………一気に言い切ったなあ」

銀時

「ま、まあな……もう後は本当になるようになった」

はやて

「そやねー。ほな、また次回ー」

銀時

「シーユーネクストアゲアン」

はやて

「何で英語？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1475o/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS～大空を舞う黒き侍

2011年3月27日22時47分発行